
人間不信の少女が異世界でなんやかんやする話

学校嫌い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間不信の少女が異世界でなんやかんやする話

【Nコード】

N9338V

【作者名】

学校嫌い

【あらすじ】

幼い頃に対人関係で人間を信じられなくなった少女、ゆきとあかね雪兎茜が異世界で第二の生を送るお話。

五つの力

「さて、君は何を望む？ 5つ位なら望む力を与えることができるぞ？」

目の前に居る白髪碧眼で白い服で身を包んだ自称神がそんなことを言ってきた。

ま、取りあえず自己紹介するか。

私は雪兎茜^{ゆきとあかね}。どこにでも居るような普通の女子高生だ。髪も目も生粋の日本人だから勿論黒い。紙の長さは腰くらいで身長は165？ 体重48？くらいかな？ バストとかは覚えてない。

何故そんな私がこの自称神とこうして話しているかと言うと典型的で、単に事故に巻き込まれて目が覚めたらこの白い空間にいたから。そんで持っていきなり「君は死んだ」って言われてこちらが「そうだろうね・・・であんた誰？」と聞くと受入が早すぎると言われたが、あの衝撃で生きている方が可笑しい。

いやゝホント凄かったぞ？ あの衝撃は・・・あんなに痛いものだったんだな。多分現場には私の内蔵やら肉片やらが飛び散っていると思う。見た人は気の毒だな？ 済まん。

ま、その後自称神が私をここに連れてきた理由を言っていたが、その理由がまた何とも下らない物だった。私は小さい頃対人関係でちょっとしたことがあって、他人を信じないようになった。所謂人間不信だな？ それでおそらく誰にも悲しまれない私を気の毒に思ったとか・・・な？ 下らないだろ？

後、補足しておく私に親は居ない。小学校を卒業して中学に入る

までの春休みの間に仕事で海外に行っていた両親が飛行機事故で死んだ。どんな仕事だったかは別段興味が無かったから聞いたことは無かったから分からない。取りあえず葬式をして、遺産は私が受け継ぎそれからは家で1人暮らし。両親は死んだが何故か私は悲しみを感じなかった。葬式の間でも涙を流さない私を親戚達はまだ理解出来てないからと言っていたが、そんな訳が無いだろうか？ちゃんと理解している。

ま、その時には既に人間不信になっていたから気を遣う親戚達もすぐに追い返した。邪魔だし……。それから中学に入って特に何もせずに3年間で過ぎて普通に高校に入ってまた何もせず生活していた、今日は帰る時に事故に巻き込まれた。

以上！あ、年齢は17。

「何を望むって言われてもね……。そもそもあんたは私をどうしたいの？」

「異世界で第2の生を送ってもらいたい。流星に一度死んだ人間が同じ世界で生きていくなれば周囲の者は騒ぐだろう？」

「そりゃあね？たしかにそれなら異世界の方がいいか……」

「本当受け入れるのが早いね、君は？こちらとしては助かるんだけど……それで決まったかい？」

「その世界には魔法なんかも有るの？」

これから行く世界がどんな所なのかによって望む力は変わる。魔法が存在しない世界でそんな物使ったら其れこそ騒ぎになること間違

いなしだ。そんなへまはしたくない。

「ああ、勿論存在するよ？魔物もね？それから人間以外の種族、エルフやドワーフ、妖精族に獣人族なんかもね？それに魔物とは違って知能を持つ魔族にそれらを束ねる魔王。君はその魔王を倒す勇者として召喚されることになるけど、別に魔王を倒すなんてことはなくていい。その世界の魔王はただ、恥ずかしがり屋なだけで、根はとても優しいからね？」

「それで魔王が務まるってことは、そんだけ強くてみんなから好かれてるってことか。・・・よし、決まったよ？まず一つ目だけいい？」

「ああ、出来ることなら何でも与えることができるからね？ああ、でも言語を理解することはおまけでちゃんと出来るようにしておくからね？書いたりすることも問題なく出来るよ？」

「それじゃ、一つ目。？記憶を操る力？を頂戴？」

自分が勇者として召喚されると言うなら、間違いなく召喚した者達には私に魔王を倒してくれと懇願して来るだろう。この自称神はそんなことはしなくてもいいと言って居たがそれでその者達が納得などする訳が無い。だから記憶を操作してそのことを忘れさせればいい。

「分かった。残り四つはどうする？」

「？無限の魔力？と？完全な隠蔽の力？」

この二つは簡単に言えば誰にも負けないと言うこと。魔法が存在するなら魔力の大きな者は色々と厄介なことを頼まれたりするかも知

れない。そんなのは願い下げだから其れを誰にも分らないように完全に隠蔽する。そうすれば厄介なことには余り巻き込まれないだろう。

「残り二つ」

「？最強の肉体？と最後に？あんたと自由に会話出来る力？」

魔法による攻撃は魔法でしか防ぐことは出来ないかも知れないがもし、いきなり仕掛けられたら反応出来る自信は無い。寝ている時などは尚更だがその辺はそのうち勘とか身に付けばなんとかなると思うけど傷つかない体があった方が楽だ。最後の力は分からないことがあったらその都度聞きたいから。こいつは人間じゃないから別に信じなくても信じててもどっちでもいい。

「え？どうして・・・君は人間が信じられないんだろ？それは僕にも当て嵌まるんじゃないのかい？」

「あんたは神なんですよ？それなら問題無いわ。それで、出来るの？」

「ああ・・・勿論可能だが、本当にいいのかい？一度与えればもう変更は出来ないよ？」

「大丈夫だよ」

「・・・分かった。話たいことがあったら念じてくれればいつでも対応出来る様にしておく。こちら色々仕事があるが、君は特別ということにするよ。それじゃ準備はいいかい？」

「ええ」

「よし。それじゃ、茜、待っているよ?」

「暇つぶしには丁度良いかもね」

「はは・・・それでもいいさ。じゃ、行ってらっしゃい」

神が手を翳すと光が放たれ其れが私を包み込み次第に眠くなっていた。この空間で最後に見たのは優しい眼差しで私を見送る神だった。行ってきますと言おうとしたが眠気のせいであまり口が動かせず声が出なくて、心の中で言った。

——行ってきます

名も無き世界

「おお！ついに召喚に成功したぞ！それにこの魔力！間違いなくこの者が勇者だ！」

所変わって周りには黒いローブで身を包んだ人の団体が居て私が座っている下には巨大な魔法陣があった。そして、今の台詞を言ったのはその団体を束ねる人なのか立派な服を着ていた。王とかそんなのかも知れない。私の格好はさっきの空間に居た時から制服のままだからなんか浮いてる感じがする。取りあえず何か聞かれたりする前に記憶を操作しようと思ったが、よく考えたら力の使い方を聞いていなかった。神に聞かため念じてみるとすぐに返事が返ってきた。

『随分早かったね？それで、どうしたんだい？あ、言葉に出さなくていいよ？念じるだけで伝わるから・・・』

『力の使い方を聞いてなかったから・・・どうすればいい？』

『ああ、そう言えばそうだったね？ごめんね？力も今みたいに念じれば使えるよ？他には何かあるかい？』

『ううん、今は無いわ。ありがとう、それじゃ』

『うん。頑張ってたね？』

そこで会話を終えて言われた通り頭の中で「記憶操作の力」を念じた。その力でこの場に居る全員の「召喚に成功した」と言う記憶を「魔法陣を封印しに来たら突然魔法陣が発動してしまった」というものに変えた。こうすればこれから先、もし召喚をしようとしても

使えないから大丈夫だろう。私のことは取りあえずこの世界の情報を集める為にもこのままにしておこうと思い、いじらなかつた。

「お主、大丈夫か！この魔法陣を封印しに来たのだが、独りでに発動したのだ！どこにも異常などは無いか？」

「ええ・・・大丈夫ですけど？ここは？」

「私が納める国の城。その地下だ」

あ、やっぱり王様なんだ？それならこの世界のことも少しは聞けるかも。

それから私は取りあえずこの入り口で待っていてくれと言われて階段に座っている。目の前で王を含むその場にいる全員が魔法陣を封印するための儀式的様な物を行っている最中だ。何か念仏のような響きの呪文を唱えて陣が輝き出してパリパリと音を立てながら少しずつ見えなくなっていく最後小さくパリリ・・・となって、完全に見えなくなった。封印は成功したらしい。

そして、王は皆に休む様に言って私の方に来た。結構優しい王様みたいだ。一番最初の台詞からは想像出来なかつたな・・・。

「待たせたな？少し話を聞きたい。謁見の間に来て貰えるか？」

「ええ。とりあえず自己紹介しておくわね？私はアカネ・ユキト」

「私はレイグ・フィレンティア・グラス。ここフィレンティア王国の王を務めている」

お互いに簡単な自己紹介をしてその後護衛の騎士が2人王の側に付き謁見の間に案内された。イメージとしては奥に玉座があってそこに王が座り他の人は立って話をする物だと思っていたけどここは長い机が中央に用意されていて王が一番奥の席に座り私はその席の右斜め前の席に座るように言われた。いいのだろうか？

それから私が元いた世界のことを簡単に話して次にこちらの世界のことを簡単にでも教えて貰おうと思い先ずはこの世界の名前を聞いた。

「この世界に名は存在しない」

意外だった。私たちの星にも地球と言う名が存在し他にも火星などが住んでいない所でさえ名前があるのに・・・。何故名が無いのか聞いてみると大昔に神々の争いによって世界が滅びかけて世界を再生させた時にこの先このような戦いを二度としないように平和から白、白から無という連想によって名をつけ無かったそうだ。それ以前の名はどの文献にも載っていない為知るものは居ないらしい。

でも、それ以外にはちゃんと名前が有るみたいだ。今私が居るここもさっき王が言っていた「フィレンティア王国」という名があり、他にも北にグレイゼン王国。南にサイガール王国。東にレンドキア王国があるそうだ。

ここフィレンティア王国では主に人間が生活しており、少数だが獣人も住んでいるみたいだ。他の国にはそれぞれグレイゼンにエルフと妖精族。サイガールには獣人。レンドキアには魔族が住んでおり、そこには私が倒さなければならなかった筈の魔王がいる。

先ずはどこに行こうかな？

「お主はこれからどうするのだ？この世界に来てしまったのはこちらに責任がある故出来る限りのことならばお主に要望を叶えることが出来るが」

「・・・少し考えさせてもらってもいい？」

「勿論だ。ゆっくり考えてくれ？おい、この者に茶を出してくれ」

王がそう言うのと近くに立っていたメイドさんが礼をしてどこかに向かった。私は考える振りをして今王から言われたことが本当なのかを神に聞いた。

『本当だよ？ま、この国の暗部については何も言わなかったけどそれは仕方ないことだ。これから知っていくだろうからね・・・』

『暗部ねえ・・・別に関係無いけど。それじゃ』

会話を終えて王が考えが纏まったかどうか聞いてきたので取りあえずこの世界の服を用意して貰うことにした。制服でも大丈夫な気はするけどこれだと目立つし。その後メイドがお茶を持ってきて私の前に出してくれた。王はまたそのメイドに服の準備を命じていた。お茶を飲み干し、王に連れられ案内された別室ではメイドが凄い数の服を準備して待っていた。この中から必要な分だけ選んで持って行っているそうさ。

見た目は余り日本のものと変わらないけど何となく違うということには分かった。

その中から黒の半袖と白いスカートを選んだ。取りあえずこれの上

に鎧やらを着れば何とかなるだろう。後は其れを買うお金だけど・・。

「この世界ってお金はなくなってるの？私今は無一文なんだけど？」

「それならば詫びとしてこちらから銀を100枚と金を10枚やる。後でまた謁見の間に来てくれ」

王はそう言って部屋から出て行った。そういうことじゃなくて一枚当たりが日本で言う円にするとどれ位なのかを聞きたかったんだけど・・・まあ、いいや。

制服を脱いで黒の半袖と白のスカートを着る。これだけだとやっぱり地味だ。

王の元に向かい銀と金が入った袋を貰って今後どこに向かうのかを聞かれ取り合えず世界を回ることにしたと答えると地図を渡された。それから外に出て魔力を隠蔽して城下町に行き、武器屋で鎧と剣、大きめの提げ鞆を買った。それぞれ銀5枚と銀3枚に銀1枚。計銀9枚だが、おつりが無かったからどれくらいなのか分からなかった。武器屋の主人に細かな調整を頼んでその場で鎧を装備し、剣を腰に差してお金を稼ぐにはどうすれば良いかを聞くと、どうしてそんなことを知らないんだみたいな顔をされたけど、気にせず聞いた。

この世界には国それぞれにギルドと呼ばれる組織が存在しておりそこで登録すれば依頼をこなしてその報酬として通過を受け取ることができる、といったものみたいだ。

札を言って、教えて貰った場所に向かうと少し大きな建物があった。看板には「フィレンティアギルド本部」と書かれていた。中に入る

と結構な人がいてその中の何人かが私の方を見てきたが無視して受付に行って登録をしに来た旨を話した。

そこでギルドについての説明を受けて渡された紙に名前を書いて渡すとギルドカードという物を渡された。そこには私の名前とEという文字。これはその者のギルドランクを表しているもので上げるには上のランクの仕事を3つほどクリアしないといけないらしい。ランクは最高Sまでであり最低が今の私のE。Sは歴代と今を合わせて5人しかいないそうだ。歴代を除けば1人。Sの壁はそれだけ高いらしいけど、私には関係ない。

このギルドは食堂も備えられているのでそこでサンドイッチを食べて代金を銀で払うとおつりとして銅が大量に返ってきたから、銀は結構高価みたいだ。それを何とか袋にしまって外に行こうと席を立つと男2人に声を掛けられた。

「姉ちゃん、結構金持ってるんだな？すこし譲ってくれねえ？」

「今俺たち金欠でさ……いいだろ？」

「だまれ」

それだけ言ってから外へ行こうとしたら今度は腕を掴まれた。私はさっさとこの場から離れたかったから隠蔽していた魔力を少し解放した。すると、今度はさっきとは違いこのギルドにいる全員が私を見た。どうやらこの程度でもかなりの魔力量みたいだ。腕を掴んでいた男は怯み一緒に居た男も恐怖からなのか何も言えずにいた。腕を振り払い今度こそ外に向かった。

出る時にまた隠蔽して分からないようにする。そして適当な店で保

存食などを買って街の外に出た。

少し歩いて周りに誰もいないことを確認して試しに小さな火を出してみると予想より大きな掌くらいの火が出てきた。

「むゝ・・・結構抑えるのが大変だな」

気を付けないと大惨事になりそうだ。

その火を出したまま鞆から貰った地図をだして燃やした。ポツと音を立てて一瞬で塵になった。

地図はその時吹いた風によって私の髪を靡かせ塵となった地図は空高く舞った。

「ま、気楽に行こうかな・・・」

妖精族の少女

「今日はここで野宿か。ま、1日で次の街まで行けるなんて思っ
てなかったし、戦闘なんか多かったから仕方ないか・・・」

フィレンティアの街を出て私はひたすら街道沿いに歩いて居たがや
はり異世界だけあって見たことが無いものばかりだ。6本足に4つ
目の狼や頭が3つに別れている蛇だったり、目がある花だったり。
興味が尽きなくて見つける度に街道をずれてしまつてまた戻るのに
時間が掛かったり・・・昼飯を食べてる時にゴ布林みたいな奴に
襲われたり、口の中に歯がびっしり生えている鳥に昼飯を取られ掛
けたりで結構疲れた。

適当に広げた場所を見つけて薪を集めてかなり抑えて火を出す。其
れを薪に移そうとしたら半分ほど燃え尽きて使い物にならなくなっ
たから、またその分を集めに行つてさっきよりも更に力を抑えて今
度は成功。

途中で倒した魔物を丸焼きにする。この魔物は地球で言うワニみた
いな外観をしており大きさも同じくらいだが、普段は水ではなく土
の中に潜み、人や他の魔物が歩く時に発生する振動を頼りに下まで
移動して捕食するみたいで夕方頃にここの近くで現れたのを火の魔
術で倒した。その時は咄嗟だったからつい力を抑えることを忘れそ
うになったが、何とか落ち着きを取り戻して一度目に薪に火を着け
た時と同じくらいの力で攻撃した。今の所剣は全く使っていない。
その内練習しないとな・・・。

暫くまって丸焼きになったワニみたいな魔物を剣で小さく切ってい
く。流石に全てを食べることは出来ないので、3分の2程をそこら

辺に居るであろう魔物にやるつもりで茂みの中に放り込んだ。すると思った通り、聞こえてくるガツガツと噛みつく音。やはり野生の魔物は食いつぷりがいい。私がまだ3分の1の半分ほどこしか食べていないのにもうどこかに行ってしまった。

どこかの街で保存が利く袋とかあるといいけど・・・大きさに関係無く入るとかさ。そんな物があればフイレンティアで買ったが、食料も買ってそれを食べるつもりだったからなく・・・。魔物を食べるつもりなんて無かったし・・・今日は保存方法が無かったから仕方無くだ。それに結構いける。

次の街での予定を立てて火を消して防御魔法を張ろうと思い、どんな効果が有るのかまでは分からないから神に聞くことにする。

『起きてる?』

『ああ、起きてるよ?というか僕は毎日2時間しか寝ないからまだまだ起きてるけどね?それで、どうしたんだい?』

『野宿するんだけど、それぞれの防御魔法にどんな効果が有るか分からないからそれを聞こうと思って』

『成る程ね・・・それなら防御魔法じゃなくて結界の方がいいと思うよ?それならまず魔物は進入できないから。やり方は力と同じ。君の魔力なら『展開』って言えばすぐに出来るよ?解除する時は解除って言えば・・・』

『分かった。やってみる。聞きたいことはまだ有るから少し待って?』

『うん』

「展開」

そう言うときンと言う音を立てて半径3メートルほどの半円が出現した。半透明だけど確かにそこに有るのが分かるから成功してみたんだ。試しに触れてみると簡単にすり抜けてそのまま外に出てしまった。それでもまだ結界は張られておりこれまた試しにそこら辺にあった小石を投げてみた。結界に当たると投げた方向をそのまま返ってきたから結構焦った。あのままだったら確実に命中してたよ・・。次に私がまた触れてみると先ほどと同じように簡単にすり抜けたから術者以外は入れない様だ。確かにこれなら安心だ。中に入っ
て話の続きを始める。

『お待ちせ』

『いや。ちゃんと出来たかい？』

『ええ。それで次に聞きたいことだけど、私の魔力はどこから来るの？』

『ん？それはどういう意味だい？』

『いえ、少し気になったのよ。あんたから貰った力とは言え、この世界に居る以上私の魔力はこの世界のどこかから来てるんじゃないのか？って』

『ああ・・。それなら心配ない。君の魔力は君が元々持っていた潜在的な力を引き出したただけだから』

『え、それって・・・』

『そう、その魔力は正真正銘君の物なんだよ。地球では魔法なんてものは存在していないことになっているからね、それに君自身、そんなことを考えたことは無かっただろ？』

『ええ・・・』

『だから、君自身もその力に気付かなかった。そして君は気付かないまま死んでしまい僕に『無限の魔力』を要求した。これは君の力が無かったら僕でも出来ないことだったよ。だから何も心配する必要は無いよ？あ、でもうっかり制御を誤るようなことが無いように気をつけてね？全力の魔法なんて使ってしまったら大陸一つは余裕で消し飛ぶから・・・いいかい？』

『分かった。ちゃんと抑えられるように練習するわ。それじゃ、お休み』

『ああ。ゆっくり休むんだよ？』

会話を終えて剣と鎧を外して横になるとすぐに眠気が襲ってきた。やっぱり結構疲れて居たみたいだ。明日からは日中は訓練しようかな？間違って大陸を消す訳にもいかないし、剣も使えるようにならないと今のままでは単に長くて細い包丁だ。砥石とか剣の手入れに必要な物も何も無いからそれも揃えないとな・・・。

魔物が出てきて無意識レベルで剣と魔法を使えるようになったら一旦訓練の時間を短くして街に向かう。夜に移動するなんて今の私では無理だし。

翌朝。目を覚まして一瞬ここがどこだか分からなかったけど数分して理解した。名も無き異世界だ。水の魔法で顔を洗おうとしたら寝ぼけた頭で制御が上手く行く筈もなく危うく窒息するレベルの水が出てきた。

「ぶはっ！ハアハア・・・危なかった。でもぼっちが目が覚めた。でも気を付けないと死ぬ」

朝から死にかけるなんて17年の人生で初めてのことだった。結果を見てみると未だちゃんと発動したままだった。解除と言うと発動した時とは違って頂点の部分からスゥーと消えて行った。取りあえず服を乾かす為先が別れている棒を2本と真っ直ぐな棒を1本取ってきて簡易的な物干し竿を作る。服を全部脱いで長い棒に通す。鎧は濡れてても問題無いから取りあえず着けた。下は何も無いけど・・・。それも次の街で買わないと駄目か・・・。

小さな火で乾かそうとも思ったけど間違って燃やしてしまったては元も子も無いので大人しく待つこと約1時間。天気も良いからすぐに乾いた。鎧を外して下着と黒い服を着てスカートを履く。最後に鎧を着けると鎧はまだ少し濡れていてまた服が少し濡れてしまった。

「はぁ・・・いいかこれくらい」

鞆を提げて剣を着け、先ずは魔法の練習をするため余り人目に着かない茂みに入り奥に進んでいく。暫く進むと広げた場所に出てそこには湖があった。ここなら水分補給も出来るし丁度いいと思い鞆を下ろして魔法の練習を始める。

小さな小さな火をイメージして指先に魔力を集めると昨日地図を燃やした時の半分くらいの大きさの火が出てきた。もっと小さくしないと駄目か・・・一度消して、また集中する。今度は更に半分くらいの大きさになった。これくらいなら丁度いい。後はこれを無意識レベルで出来るようなればOKだ。そして次はすこしづつ大きくしていく練習をして、剣の練習に入ろう。

それから2時間程の時間を要して何とか小さな火はすぐに出せるようになった。多分この環境が良かったのだと思う。何故かは分からないがここはとても澄んでいて、静かだから集中するのに向いている。もしかして、神聖な場所だったりするのだろうか？水も底が見える位澄んでるし。泳いだら気持ちいいだろうな・・・タオルとか無いから無理だけど。そのうちまた来ようかな。

少し休憩して今度は大きくする練習を始める。魔力が尽きないとは言え、やはりまだ慣れていないから疲れる。これじゃ、まだまだ魔法と剣を同時に使うのは無理だな。早く両方を扱えるようにならないとな・・・さて、集中集中。

大きくするのはイメージだけなら小さくするよりも簡単だが、制御が難しい。間違ったら大爆発なんてこともあり得るからそのプレッシャーもあって余計に・・・。すこしずつ大きくして行き掌大にしようとして集中を始めて火が出始めた頃。

「わっ！」

「うわあ！」

いきなり目の前に小さな羽のある少女が現れた。勿論そんなことをされて今の私が魔法を制御出来るわけも無く爆発が起きると思って

いたがいつまで経っても起きなかった。見てみるとその少女が何か力を使ったのか火を何かで包んでいた。

「風？」

おそらくそうだろう。僅かに気流の流れを感じた。

「そうよ？ 貴女はまだ魔力を完全に制御はできてないのね？」

「ええ。魔法を使うようになったのは昨日からだから・・・まだ全然上手く扱えなくて。取りあえずその火、消すよ？」

「あ、うん」

少女の風がすこしずつ収まっていき完全に消えてから火を消した。それからその少女に自己紹介をされた。名は『ミレイン』というらしい。ファミリーネームが無いのは彼女が妖精族でこの世界に流れる魔力とは別の力である『マナ』という力から生まれる存在であり、名は生まれてすぐに妖精を束ねる女王が与えるみたいだ。偶に自分で考えたいという妖精が居るが女王は其れを尊重するようで、むしろそう言った妖精が増えて欲しいと思っているみたい。ミレインもその1人。

「へえ・・・その女王ってミレイン達からすると母親みたいな者なの？」

「まあ、そうなるのかな？ 考えたことが無いからよく分からないけど。其れよりアカネはどうして此処に来たの？」

「人目につかない場所を探してたらここに辿り着いただけ。それで

思いの外集中出来たから練習してたの・・・迷惑だった？」

「ううん。そんなことは無いけど人間がこの場所に来たのは初めてだから」

「そうなんだ。だからこんなに綺麗なんだね？」

「え、ここ綺麗？」

「うん。空気も澄んでるし・・・何よりも落ち着く。あ、ごめん。人間が来たこと無いなら私も駄目だね？すぐに出て行くから。それじゃ！機会があったらまた会おう！ミレイン！」

鞆を提げ剣を腰に差してその場を去った。後ろでミレインが何か言っていた気がするけど体に比例して声も小さいのかよく聞こえなかった。来た道を辿って茂みを出て別の練習場所を探すためにまた街道沿いに歩き出した。

「・・・また、会えるかな・・・」

ミレインとの再会を願いながら。

仲間が出来た！

「お前、私と行きたいのか？」

さて、ミレインと会った日から6日。つまりこの世界に来て1週間が経過した。剣の方はまだまだだが魔法なら小さな火に関してはほぼ無意識レベルで出せるようになった。5日め位に薪に火を着けようとしたら自然と指に火をともしっていて大きさも丁度良かったから結構嬉しかった。今は火の練習よりも水の練習に時間を掛けている。水の制御を誤るとまた服が濡れてしまうから結構大変だ。

2日目に決めた通り日中は魔法と剣の練習をして夕方くらいになったら歩いて周りが確認出来なくなるまで進んでから野宿の準備をする。幸い街道が途切れたりすることは無いから今の所迷うことなく進むことが出来ていた。

5日目の夜、飯の準備をしていると森の方で騒ぎがあり行ってみると小さな翼が生えている生物が村人なのか、5〜7人の男に追い詰められていた。その黒い生物は炎を吐いたりして近づけないようにしているがいつまでもは続けられず炎が途切れた時に細身だがバランスよく鍛えられた体を持つ男が斧で攻撃を仕掛けた。その攻撃が当たっていたらその生物は確実に死んでいた。私が火でその男を攻撃して他の者達の気を逸らしてその生物を連れて逃げた。男達の叫び声が聞こえたがそれは完全に無視した。

そして、その生物を野宿場所まで連れて行って見ると正体が分かった。龍の子供だった。まだまだ小さい体に多数の切り傷があり、弱っているのは火を見るよりも明らかだった。でも子供は私も男達と同じだと思っているようで腕の中で弱々しく抵抗していた。出来る

だけ優しく語りかけて癒しの魔法を掛けけど、深い傷や昔の傷跡は完全には癒せなかった。

取りあえず子供は警戒心はいくらか和らげてくれたのか抵抗はしなくなってくれた。それから火を消して結界を張り、出来るだけ近づいて眠りに着いた。翌朝起きると子供が近寄ってくれていた。それでも2メートルくらいあったけど・・・。

水を制御して目を覚まさせて結界を張ったまま、少し離れた所で練習を始めた。大分慣れてきた様で少しの水なら火と同じくらいに扱える様になった。もう少しで増やす段階に入れる。それから30分程続けて本当にあと少しと言う所でミレインの時の様に

「ガウ！」

「わっ！」

いきなり鳴き声が聞こえて驚いてしまい水があふれ出しました。濡れになってしまった。火じゃなくて良かった・・・。後ろを見ると子供が私の近くに來ていた。何かを伝えようとしているみたいだが生憎言葉は分からない。そう言えばそろそろ腹減ってきたな・・・。

「お前も飯食べるか？」

そう聞くとあちらは私の言葉を理解している様ですぐに頷いた。朝食の前にまた3本の棒を拾ってきて、2本を立てて服を脱ぎ3本目に服を通して乾かし始める。鎧は着たまま。鞆から食料を出して子供に分けて自分も食べ始める。もうすぐ食料も無くなるな。しばらくはまた魔物を食べないと駄目かも。節約にはなるけど・・・。

朝食を食べ終わりそれからまた練習開始。子供は今度は寝てしまった。まだ疲れが残っていることと腹が膨れたからだろう。1時間程練習をして服が乾いたことを確認して鎧に残っていた水滴を小さな火で蒸発させて服を着ていき最後に鎧を着けて完了。同じ轍は踏まない。

木の棒を森の中に投げ入れて次の街向けて出発。の前に結界を解除して今度こそ出発した。子供はこのまま放っておく訳にもいかないと思ったけど無理矢理連れて行っても意味は無いからその場に残して後は自由にして貰おうと思っていたが、暫く経って振り向いて見ると後ろを着いてきていた。まあ、自分で決めたならそれでいい。

3時間ほど歩いた所でまた練習を始める。今度は子供は起きていたがいきなり吠えることはなかった。多分私がしていることを理解してくれているのだと思う。そのお陰で練習は捗り水の量も大分増やせるようになった。ふと空を見てみると夕方になっていた。

「始めた時はまだ昼前だったのに・・・そう言えば魔物にも全然会わなかったな。どうしてだろう？」

いくら集中していたと言っても今は結界も張ってなかったからいつでも襲おうと思えば襲える状態だった。にも関わらず一度も戦闘は起こっていない。もしかしてこの子供かな？見た感じは間違いなく龍だし、子供とは言え持っている力は大きいのかも知れない。それなら野生の勘でこの子供には敵わないと感じて襲ってこない。近くにいる私にも・・・。

魔物が襲ってこないならむやみに狩る訳にもいかないから今日も残っている食料を2人で分けて食べることにした。子供との距離は1メートルまで近づいていた。もう少しで0になるかな？食べ終わっ

たらまた練習。さっきまでの練習のお陰で少量の水はすぐに出せるようになった。まだ無意識レベルまでは達してないけど、焦らずに行けばいい。終わった頃にはもう夜になっていたので、結界を張って鎧と剣を外し鞆を枕にして眠りに着く。

目を閉じて少しすると小さな足音が聞こえて胸の辺りに温かさを感じた。それが心地よくてすぐに眠ることが出来た。

目が覚めて胸の辺りを見てみたがそこには誰も居なくて昨日と同じ1メートルの距離に子供はいた。少し残念……。今日は寝癖が付いていたので其れを魔法で直してまた結界はそのままにして少し離れた所で練習を始める。1時間程してそろそろかなーと思っていると予想通り鳴き声が聞こえた。其れを聞いて結界に戻り食料を出してまた2人で分けて食べる。

食べ終えて結界を解除して出発する。暫くして振り向くとまた付いてきていたから思い切って聞いてみた。それが冒頭の台詞である。子供は少し間があったが

「ガウ！」

と一鳴きして了承の意を示してくれた。私は近づいて抱き上げて見た。抵抗もしなかったから本当に私と一緒に来てくれるみたいだ。

こっちに来て初めての仲間が出来た！

「名前付けないとね！」

「ガウ！」

「うゝゝん・・・よし、決まった！君は今から『テイル』だよ！よろしくね！テイル！」

「ガウガ！」

人間のように表情がはつきり変わる訳じゃ無いけど、喜んでくれて居たらこちらも嬉しい。

その日は練習もこれまでで一番捗り、少量の水なら無意識レベルで出せるようになった。

私が喜ぶとテイルも喜んでくれた。

其れが堪らなく嬉しくて思わずぎゅっと抱き締めた。

苦しそうに声を上げるテイルに謝り一緒に夕飯を食べて結界を張る。

そしてその日はテイルを抱き締めて眠りに着いた。

ずっと一緒に

「やっと着いた」

テイルが仲間になって3日。私たちは今門の前にいる。その門は開いていて上の看板には「フィレンティア王国・2の街」と書いてあった。どうして2なのかは多分私が最初に居たあの街が1だからだと思う。この国がそれぞれの街にこのこと同じような名前を付けているなら他の国もそうなのかな？

「取りあえず、入ろうか？」

「ガウ」

浮遊していたテイルを腕の中に納めて私たちは街に入り先ずは食料を買うことにした。2日ほど前に食料が尽きてしまい、それからはテイルがいるにも関わらず襲ってくる大型の魔物が2〜3体居たのでその魔物達を倒して食べた。

神にテイルのことについて聞くと、種族名は「シャドー・ドラゴン」と言うらしい。シャドーとはそのまま影と言う意味で、成体になると大きさに関係なく影に潜り込むことが出来るようだ。成体になるには早くて2年ほど掛かるらしい。本来テイルのようにまだ子供のシャドー・ドラゴンは親と一緒に影に潜って守るみたいだ。だけどテイルは会った時から1人で襲われていた。神ははぐれたのか親が死んだのか、もしくは捨てられたのかも知れないと言っていた。もしかしたら旅の中で親に会うことになるかも知れない。

後、他にも龍族は姿を見せないだけで結構いるらしい。魔法の属性

と同じで火・水・風・土・氷・闇・光。他には自然を司る龍もいる
そうだ。この世界の自然現象はその殆どがそれらの龍によって引き
起こされており、雨なら水龍族を納める「アクア・ドラゴン」が、
雪なら氷龍族を納める「アイス・ドラゴン」が、と言った具合で・
・。

それから自然を司るのではなく存在そのものが自然である龍もいる
と言っていた。でもこの世界が生まれてその姿を見せたことは未だ
ないらしい。それはつまり自然現象の何が龍によって引き起こされ
ているのか分からないということ。さっき言った雨などは龍のもつ
力によって引き起こされているから存在そのものが自然と言うわけ
では無い。でも、怒らせたり、もし力が暴走なんてしてしまったら
世界が滅んでも可笑しくは無いようだ。

「凄いよね？ 龍って・・・」

「ガウ！」

食料を買い込んで次にギルドに向かった。仕事もしないとお金が稼
げない・・・とは言ってもまだまだ王から貰った物が有るからしば
らくは大丈夫だけど、戦いに慣れる為にも仕事はしなければならな
い。これまで戦った魔物の殆どが加減しても最初の一撃で倒してし
まうから訓練にならない。腹の足しにはなるけど・・・。それに魔
法の練習ばかりしているから魔物が出てきたら自然と火を放ってし
まう。剣で戦ったことは一度も無いんだよね・・・。

ギルドに入るとまた視線が集まった。私を見る人とテイルを見る人
が半々と言った感じだ。ちなみにテイルは私のここに来るまでの間
に私の腕の中で眠ってしまった。可愛いね。クエストが書かれた
紙が貼られているボード。クエストボードに向かい上の方にある紙

を見る。上のほうにあるのはランクが下クエスト。上になれば成程中央部分に張られ、目に付きやすい場所に張られる。だから私が受けるクエストであるDランクのクエストは結構上でぎりぎり手が届かない所。

「テイル、テイル」

「・・・ガ？ガウゝ・・・？」

はぁ・・・可愛い。と、今はそれよりも仕事。少し寝ぼけているテイルに紙を取って貰った。意外と器用に前脚を使って・・・。ありがとう、と良いながら紙を受け取りまたテイルは私の腕の中に収まり眠り着いた。よくそんなに寝れるね？受付に行つて紙とギルドカードを渡して少しして受け付け完了。

外に出ようとするすると前と同じように声を掛けられたが今度は女の人だった。肩まであるウェーブがかかった金髪。紅い瞳。格好は私と少し似ているが鎧と剣は全然違った。なんとなく質が違うと言うか、まあそんな感じ。身長は私より5？くらい高いから自然と見上げる形になった。

「・・・・・・・・・・」

「あら、この私が声を掛けてあげたのに無視？」

関わるつもりなんか毛頭ないし、この女が誰かなんてことも知らない。興味も無い。さっさと出て行こうとしたけど道を遮られた。はつきり言つてうざい。何だと言うのだ？

「無視するどころか何も言わずに出て行こうとするなんて・・・貴

女、何様のつもり？」

「うざい、どけ」

「な！」

何を驚いて居る？誰だって知りもしない人物にこんな態度を取られれば思うだろう？周りの連中はなにやら騒いでいるけどそんなことは知ったことではない。私は早く仕事に向かいたいのだ。それにテイルも起きてしまう。折角こんなに気持ちよさそうに眠っているのに・・・遮音の結界って有るのかな？今の状況じゃ聞く余裕もないし・・・

『あるよ？』

「うわ！びっくりした！」

「何よいきなり！」

こちらが呼びかけていないのに神の声が頭に響いてきた。今まではずっと私から話しかけていたからやらなかったみたいだけど、あっちからも1日に数回程度なら出来るみたいだ。そういうことは早く言っただけだった。ごめん、ごめんと軽く謝られ余り長くは話せない様なので遮音の結界の出し方を教えて貰った。単純に展開の前に「遮音」と付けばいいそうさ。

『それから、結界を鎧の様に体に沿って張ることも出来るよ？装備って付けば・・・それじゃ』

と最後にそう言って神は通信を切った。

「装備・遮音・展開」

早速試してみようよと思い、唱えるところまでと同じようにキンと音を立てて私とテイルの体に何かが張られた感覚があった。そうすると周りの音が一切聞こえなくなった。結構便利だ。私は今度こそ外に向かった。

初めてのクエストの内容は近くの森に生息する「トライ・サーペント」の討伐。最初の頃に会った頭が3つに別れている蛇だ。駆け出しの冒険者（ギルドに登録してる人のこと）でも十分1人で戦える魔物。

取りあえず結界を解いて未だ寝ているテイルを連れて森に向かった。1時間程歩くと森が見えてきて立てられている看板には「水龍の森」と書かれていた。何で？とも思ったが細かいことは気にせずに入った。トライ・サーペントが森のどこに居るのかまでは分からないから地道に探すしか無い。

それからまた1時間程歩いているとテイルが目を覚ましたので今の状況を説明する。ガウっと一鳴きして理解したことを示し、ふわふわと浮遊する。大きくなると背中に乗せてくれたりするのかな？聞いてみると元気な返事を返してくれた。

「やった！そのときはよろしくね！」

「ガウ！」

一緒に奥へと進んでいくと前にミレインと会った時の様な場所に出

た。違うのは湖の中央に周りの木を悠に凌ぐ大きさを持つ巨木があること。外から見ても分かる位の大きなのにどうして気付かなかったんだろう？そんな疑問が生まれたけど、それは突然聞こえて来た声によって遮られた。また、神かとも思ったけど声が明らかに違う。何か威厳と言うかそんな声だ。テイルにも聞こえているのか声の発生源を探している。

『ハハ・・・探しても見つからんよ。今は頭に直接語りかけているのでな』

テイルの姿が微笑ましかったのかさつきより声が柔らかくなった。孫に語りかける様な、そんな声。取りあえずテイルを腕の中に納めるとその声はまた、語りかけてきた。

『そなたはシャドー・ドラゴンだな？何故人間の娘と共にいるのだ？』

「ガウ？」

『人間達は儂等を見つければ、力を恐れ危害を加える存在だ。何故そんな者と居る？』

その声にさつきまでの柔らかさは無かった。どうして人間などと居るのか？自分たちに危害を加える様な存在である人間。それは正しい。私が会った時もテイルは人間に追われていた。もしも後少しでも遅れていたら・・・そう思うと背筋が寒くなる。

「ガ・・・ガウ」

「あ！ごめん、テイル！苦しかったでしょ？」

「ガウガゝ・・・」

知らない内に力が入ってしまった。謝ると気にするなと言うように前脚をひらひらと振る。

「ごめんね？」

「ガウゝ」

今度は優しく抱き締めた。テイルが何を言ってくれたのかは私には分からないけど・・・。

『お主は・・・その者を好いて居るのか？』

「ガウ！」

『・・・そうか。それならば何も言うまい。今度会う時は儂も姿を見せよう。ではな？』

それっきり声は聞こえなくなった。私達は暫くその場で立ちつくしてそれからまたトライ・サーペントを探しに行った。それから見つけ出して、剣で戦った。頭が3つ有るのは結構危なくてどれか1つを攻撃していると他の2つが攻撃してくるから危ない場面があったけど、テイルが頭を1つに纏めてくれたから、一気に――

ザシュ！

切り落とした。

これでこのクエストは終わり。・・・でも・・・。

「帰ろうか？」

「ガウ？」

剣に付いた血を払って鞘に収めて、テイルを抱き抱える。街に戻ってクエスト終了の旨を伝えて報酬の銅5枚を貰う。その時に宿の場所を教えてもらってその宿に向かい、部屋を取る。2階にある一番右奥の部屋に入って、剣と鎧、鞆をベッドに放って備え付けのお風呂にテイルと一緒に入る。体と髪を洗った後にテイルの体を洗って湯船に浸かる。

「・・・・・・・・」

「ガウ？ガウガウ！」

「・・・テイル・・・」

「ガウ・・・・・・・・」

「あはは・・・くすぐりたいよ」

ぺろぺろと頬をなめてくるテイル。舌がざらざらしていきすぐらわれている感じがする。

「テイル、私ね・・・怖くなったんだ」

「ガウ？」

「今日始めて、剣で魔物を倒したけど・・・その感覚がずっと残ってて忘れられないの・・・。怖かった・・・この先も、あんな感覚を、味わうのかって・・・」

私の声は自分でも分かるほど震えていて、目からは涙が流れていた。テイルを抱き締めて湯船の中で私は泣き続けた。こんな感覚を味わうならこの世界に来ずにあのまま死んだ方が良かったとも思った。

でも・・・

「ガウゝ・・・ガウガ、ガウ」

この世界に来なければテイルと出会うことも出来なかった。また、顔を舐めてくるテイルをギュッと抱き締めるとテイルも首に手を回してくれた。それが、嬉しくて私は更に涙を流した。

暫くして落ち着き、お風呂から出てテイルの体を拭き、別のタオルを体に巻き付ける。装備を机に纏めて置いてベッドにテイルと一緒に横になる。

「テイル・・・」

「ガウ？」

「私・・・あなたと出会えて良かった。出会ってくれてありがとう」

「ガウ！」

元気な返事をしたテイルを抱き締めて目を閉じると、すぐに睡魔が襲ってきた。これから先も今日の様な感覚を味わうことになるけど・

・あなたと一緒に乗り越えられるから・・・だから。

「ずっと・・・側に・・・・・・・・いて・・・ね・・・？」

「ガッウ・・・・・・・・」

この時のテイルは・・・笑ってくれていたと思う。

ずっと一緒だよ？テイル。

隣に立つために

「よし、お疲れ様。テイル」

「ガウ！」

あれから1ヶ月。私は剣の練習に重点を置いてクエストを受けていた。あの次の日も魔物の討伐をしたけど、やはりたった数日でなんとかなる物では無かった。でも、テイルが居て一緒に戦ってくれていたから、泣くことは無かった。2週間ほど経ってやっと慣れてきて、それからは魔法も織り交ぜて戦い、火と水だけでなく風と氷を少し使えるようになった。まだ、本当に少しだけど……。

魔物のことも少し勉強したけど、姿と名前を一致させるのに時間が掛かるので、クエストボードで名前を見て姿を思い出すまでに数分かかる。その間に取られることは無かったけど。今ぱっと出てくるのは最初の仕事で倒した「トライ・サーペント」。最初に食べたワニの様な魔物の「アークロン」に、昼飯を取られそうになった「トウス鳥」。それから……一番最初に見た魔物、6本足に4つ目の「レグルフ」と……。あ！魔物じゃないけど目があつた花の「アイフラワー」に……。それに……。それに……。今はこれくらいかな？ 今日倒したのはレグルフ。

後、話は変わるけどテイルが少し大きくなった。全長50？位だったのが今の時点で55？位。まだ腕の中に収まる大きさだけど後10？位大きくなったら厳しいかも……。そのうち私の身長を遥かに凌ぐ大きさにまでなるんだよね？ 成体になると50メートル位にまでなるみたいだし。大きくなるのは嬉しいけど、ご飯どうしよう？ 多分銅が100枚で銀1枚分くらいだから今の私の財産は、殆ど使っ

てないから・・・銅が百円として十倍で千円。千円の十倍が1万円。銀は今40枚位だから・・・40万円。銀10枚で金一枚でそれが使っていないから10枚。10万円が10枚だから100万円？じゃあ、今の財産は約140万円位かな？無駄遣いしなければ何とかなるかも・・・約2年後のことだけどお金は計画的に使わないとね？

2の街に戻ってクエスト完了の報告をして銀一枚を貰う。それからずっと泊まっている宿に帰りシャワーを浴びる。服は結局買ってないからテイルの体を拭いた後タオルを巻いてベッドへダイブ。夕飯までテイルと遊ぶ。この宿はバイキング方式で朝食は6時から10時。昼食が12時から3時。夕飯は6時から12時。こんな感じで時間が決まっている。今はまだ、2時位だけど、昼食は帰ってくる途中で食べたから。後4時間程空きがある。

テイルと遊んでいる内にどちらが先だったかは分からないけど、2人とも寝てしまった。起きると外は夕日が出ていたから多分もう、夕飯を食べられる。服を着てテイルを抱き抱え下に降りるとちらほらと人がいてグループで旅をしている人や1人で旅をしている人達が夕飯を食べていた。テイルを片腕で抱き抱えて皿に肉と野菜にパンを取って適当な席に着く。膝にテイルを乗せて先に食べ始めて少ししたら匂いに釣られたのか眠気が残っている目で私を見上げた。はぁ・・・本当可愛い。

「おはよう、テイル。ご飯だよ？」

「ガウゥ・・・グアア・・・」

欠伸をしてテーブルに前脚をかけて肉を食べ始めるテイルに時々野菜を食べるように言ってから私はそんなテイルを見ていた。・・・約2年後には50メートル位にまでなるなんて想像出来ないな・・・

。テイルも夕飯を食べ終わり皿を返してから部屋に戻り、歯を磨いてもう一度お風呂に入る。軽く洗って湯船に浸かって、テイルの体を拭いてタオルを巻いて再びベッドへダイブ。現在時刻は7時。まだまだ早い時間。それにさつき寝たから眠気が全く来ない。魔法の練習も部屋じゃ出来ないし。結界を張れば大丈夫かな？外に音が漏れないようにして・・・装備みたいにする時に「装備」って付ければ良いなら付けずに言えば普段の結界を同じように出来るかも。起き上がって部屋の中央に行く。

「遮音・展開」

キンと音を立てて半円の結界が張られる。テイルに一度外に出て貰って音が漏れていないか確認して貰う。私が何を言っても聞こえないと言う風に首を振るから多分聞こえていない。手招きして中に戻って来たテイルに今度は中に残って貰って私が外に出る。中でテイルが鳴いているけど声は聞こえない。どうやら成功らしい。中に戻って早速練習を始める。

「テイル、暇ならもう寝てても良いからね？」

「ガウガウ・・・ガウ！」

一緒に居てくれるみたいだ。ありがとうね？

予習というか慣らしと言うかそんな感じで先ずは火と水を出す練習を始める。この2つはもう本当にすぐに出せるようになった。小さな火を指先にもとして段々大きくしていき掌サイズになったら今度は消えるまで小さくしていき、次に水を出す。同じように大きくして小さくし、今度はミックスさせる。火と水を細い棒状にして2つを螺旋状にくるくると回しながら回転速度を上げていく。これは今

思いついたから自信は無かったけど出来て良かった。指先から滑るように掌へ移し速度を維持したまま規模を大きくしていき、最後に2つを完全に1つにしようと思い収縮していき2つがぶつかりあった瞬間、ボン！と爆発が起きてどちらも霧散してしまった。これも練習しないと・・・。魔力を抑えて練習してて良かった。

取りあえず次は水と風の練習だ。これはどちらもまだまだなんだよねー・・・。小さな風でも火より難しい。ミレインは凄いと思う。爆発が起きる瞬間に火を包み込んで抑えたんだから。今の私じゃ、あんなことは無理だ。もっと頑張らないと。両手を胸の前に持ってきて間を拳1つ分位開けて中心に風を起こす。少ししてヒュウウウ・・・という小さな音を立てて風が発生した。風はまだ両手じゃないと出来ないんだよね・・・。少しずつ大きくしていこうとするけど中々上手く行かずに霧散してしまった。

「ふう・・・難しいな・・・」

「ガウ！ガウガウ！」

「テイル・・・分かってる、諦めたりはしないよ？」

何を言っているのかは未だに理解出来ない。でも、励ましてくれていることは分かる。テイルに励まされたら途中で投げ出すわけには行かない。この1ヶ月ずっと側で私を支えてくれたんだから。でも、やっぱり疲れるんだよね？これじゃ、テイルが大きくなった時に隣で戦うことが出来ない。絶対に諦めたら駄目だ。隣に居る為にも・・・。

「よし！頑張ろう！ありがとう！テイル！」

「ガウ！」

練習を再開して少しだけ、本当に少しだけ風を大きくすることが出来た。それだけでも本当に嬉しい。テイルも喜んでくれる。・・・でも、これ位で満足していたらいけない。テイルが成体になった時に一緒に戦えないと、どれだけ魔力を持っても意味がない。ずっと一緒に居ると約束したんだからそれに見合うだけの力を身に着けないと。

「ずっと一緒にいたいから・・・」

「ガウ？」

「何でも無いよ？今日はこれ位にしてもう寝ようか？」

「ガウ」

結界を解除してベッドに入る。魔法の練習をしていると時間があっという間に経つ。今は10時。3時間も経っていた。それでも眠気はまだ来ない。暫くテイルとじゃれて、先にテイルが寝た。テイルの頭を撫でながら私も次第に眠りに着いた。

お休み。テイル。

神殿

「黙らないと殺す」

皆さんこんにちは。いきなり物騒ですがそれは仕方有りません。私たちの目の前に居るこの男が原因です。容姿の説明なんかは面倒なのでしません。と言うかしたくありません。強いて言うなら背が高いです。それだけです。

この街に滞在して2ヶ月。そろそろ次の街へ向かおうと思いここでの仕事は今日で最後にしようと思ってギルドにてクエストを探している最中のこと。声を掛けられ振り向いて見ると男が居た。その男はこちらが聞いても居ないのに1人で話しかけた理由を説明し始めた。その話の中で私のことが出てきた。最近少し噂がある様だ。「小さな龍を連れた黒髪黒目の冒険者」。そんな感じで・・・それで今日のクエストと一緒にやって欲しいとか何とか抜かした。クエストは何人で受けても良いことになっている。その分1人1人の取り分は減るけど、複数で無ければ難しい物もある。私たちには関係無い。

「・・・・・・・・へ？」

「装備・遮音・展開」

仕事を探す気が失せてしまい結局仕事は何も受けずに次の街に向かうことにした。ギルドを出て結界を解き、宿屋で荷物を回収して女将さんに挨拶をした後、食料を買って街を後にした。

テイルはいつも通り腕の中でまだ寝息を立てている。本当によく寝る子だね。ちゃんと運動はしているから太りはしないと思うけど・・。順調に大きくなっているテイルを見てそんなことを思う。あれから目立った成長はしていないけど3〜5?位大きくなったと思う。まだ腕の中に収まるから大丈夫。

街道を南に歩きながら次の街は何処に有るかな?と思いながらのんびり歩くこと1時間。テイルが目覚まして以前の様に状況説明。途中で魔法の練習をしながら襲ってくる魔物などを倒しながら歩き続ける。今の魔法は火・水・氷・風の4つをミックスする練習をしている。実戦で使うにはまだまだだし、そんな余裕も無いからもっと頑張らないといけないけど、今の時点ではこれが精一杯。

「テイルは大きくなったら火を吹いたり出来るようになるの?」

「ガウ!ガウガウ。ガーーウー!!」

————ボオオ・・・

質問に一鳴きして答えた後見ててとても意言うように自分をちよいちよいと指さすテイルを何だろう?と思いながら見ていると口を大きく開けてまだ小さいけど私の火よりは大きな黒い火を吹いた。黒いのは多分属性が関係しているんだと思う。テイルはシャドー・ドラゴンの子供だから属性は闇。其れが色になって火に表れたのかも知れない。だったら水龍は蒼い火なのかな?

でも、其れよりも・・・

「凄いね!テイル!」

テイルの成長が嬉しかった。一緒に強くなってるんだって思えるか

ら。テイルを抱き締めると嬉しそうに「ガウ！」と言ってくれた。負けないように私も力を付けていけないとね？ 頑張るから！

「これから一緒に強くなって行こう！」

「ガウ！」

新しく魔法が使えるようになることよりも、何よりもテイルの成長が本当に嬉しい！初めはこの世界に来てみずっと1人で生きていくと思っていたけど、すぐにテイルと言う仲間が出来た。最初はずつと警戒されてたけどご飯は要求してきてからなんだか可笑しかった。それでも、少しずつ距離を近づけてきてくれて仲間になってくれた。今では寝る時もご飯の時もお風呂の時も戦う時も一緒にテイルは、いつの間にか火を吹けるようになっていた。ひと通り騒いだ後、歩みを再開する。

それからこれまでと同じように魔法と剣の練習をしながら進み、途中で魔物が出てきたら一緒に戦う。次の街には多分1〜2週間位かかるかも……。急ぐ必要は無いから別にいくら時間が掛かってもいいんだけど……。街道、外れてみようかな？ ミレインと会った森みたい意外な場所があるかも知れないし。

「テイル……。街道それてみよう？」

「ガウ？」

「決まった道じゃなくて自分たちで決めた道を歩いて見ない？ したら、もっと面白い発見が有るかもしれないよ？」

「……。ガウ！」

「ありがと。それじゃ、行こ！」

「ガウ！」

真っ直ぐ伸びている街道を横にそれて歩き出す。地図は燃やしたから何処に何が有るか何て分からないけど、地図に載っていない場所だって絶対に有ると思う。全て見つけることは出来ないからね？そんな場所には何が有るのかな？

「うわぁー・・・大きいね？」

「ガウウ・・・」

街道をそれて歩き始めて1ヶ月ほどが経過して、今渡し達の前には神殿の様な建物が聳え立っている。ここに来るまで散々迷ったり行き止まりになったりして時間が掛かってしまったけど、その時間は苦じゃ無かった。テイルはずっと隣に居てくれたから寂しさなんて感じなかったし・・・でも、残念なことが1つだけある。

テイルを・・・テイルを・・・抱っこできなくなっ
たんだよー！ー！！

もうそれだけが、本当に残念なんだよ！大きくなるのは嬉しいけど！急激に大きくなって！今では立ち上がると私よりも高いんだよ！？これじゃもう抱っこできないよ！夜にテイルが羽を布団代わりに掛けてくれるのも嬉しいけど！抱っこが出来ないのは本当に残念なんだよー！

はぁ・・・成長期は凄いな？

地べたに四つん這いになって心の中で嘆いているとテイルが鼻先で突いてきた。うう・・・本当に大きくなったね？今じゃいくら頑張っても顔に抱きつくしか出来ないまでに成長して・・・多分もう2メートルはあるよ？

「本当に大きくなったよね？すこしだけなら、私が乗っても飛べるようになったし・・・」

「ガウ！」

「フフ・・・そろそろ入ろうか？面白い物を見つける為に」

「ガウガ！」

全体が見事に真っ白な、名も分からない神殿に入る。ここは本当に誰の目も着かないような森の奥にあった。水龍と会話した所にあった木が見えなかった理由は未だに分からないけど、この辺の森は木が少しずつ大きくなっているから外部からは分らない。見つけたのは偶然、食料が少なくなってきたから何か山菜の様な物でもない

かな〜・・・と思ってどんどん奥に進んでいくと建物らしき物が見えてきたから進んでみるとこの神殿に辿り着いた。

中は結構広い造りになっていて、私とテイルが並んでも余裕で通れるから助かった。それに灯りも無いのに暗くなくて安心して進むことが出来る。魔法か何かがずっと維持されてるのかな？そうだとしたらこれをやった人は相当な魔術師ってことになるけど・・・人が入った様な跡なんかないし。神殿の付近には誰かがここに来たような痕跡は無かった。土も綺麗だったから、多分私たちの足跡しか残ってないと思う。・・・あくまで予想だけど。

暫く進むと螺旋階段があって上下どちらにもいけるようになっていた。

「どっちに行く？」

「ガウ！」

「下だね。階段は並んでは無理だから私が先に行くよ？」

先に行こうとしたらテイルに腕を引かれて振り向くと首を振っていた。

「テイルが先に行くの？」

「ガウガウ・・・ガウ！」

「ああ・・・一緒にね？」

「ガウ！」

さっきも説明した通り今のテイルは私を乗せて移動出来る。それは空だけでなく地上でも一緒だ。私が目を覚ますとテイルの背中に乗っていた、なんてことは最近をよくある。大きくなって起きるのが早くなったからね？背中に乗って辛いのか聞くと元気な返事が返ってくる。そのままテイルは階段を降りていき、また広い空間に出たから私はお礼を言って背中から降りた。

「ありがとう。遅くなったね？」

「ガウ！」

「フフ・・・」

周りを観察してみるけど3方向に扉が有るだけで他には特に何も無かった。取りあえず手当たり次第に進むことにして先ずは正面の扉を開ける。この神殿は誰を崇めていたのかな？ふとそんな疑問が浮かんだ。普通に考えれば神何だろうけど、私が知っているのは私をこちらに送ったあの神だけで、それ以外の神なんて知らない。この世界にも神は居るんだろうけど別に会いたいとは思わない。どうでも良いことだからね。

中には何も無かった。他の2つも同じ。もう誰も使わなくなったのかな？そうだとすると何の痕跡も無いのはどうなんだろう？

もう一度確認してみようと思って最初に入った部屋に入るとさっきは見つけられなかった一冊の汚れたノートが隅に落ちていた。ぱっと見ただけだから気付かなかったのかな？そのノートを外で待っているテイルの所に持って行き開く。

白。

何も書かれていなかった。他のページも同じ。何度確認しても何も書かれていなかった。

「……取りあえず持っておこうか？ 何かに使うかも知れないし」

「ガウ……」

鞆にしまつて他の部屋も何か無いかともう一度確認したけど、何も見つからなかった。隅なんかも隈無く探してみたけどやはり何も無いから、上に戻ることにした。またテイルの背中に乗って階段を上がりどうせだから上にも行こうということになり、そのまま上に向かう。

可笑い……。

「もうとつくに着いてる筈なのに……」

「ガウ……」

外観から大きなことは分かっていたけど、上が見えない程の大きさがあつた訳では無かつた。にも関わらず階段を上がり始めて既に30分は経っているのに先が見えない。いくらなんでも時間が掛かりすぎて……。テイルからは10分程前に降りて、私が後ろを歩いている。ずっと乗っていたら大きくなったとは言っても疲れが出てくるから……。

一度引き返した方が良くかもしれない。

「テイル、一度戻ろう？」

「ガウ？」

「この神殿は何か可笑しい・・・テイルも感じてるでしょ？」

「ガウ」

「それなら、一度戻ろう。どこかでこの神殿に着いて分かるかも知れないから、そしたらまた来てみよう？」

「ガウガ・・・」

そして階段を降りて行くと5分と掛からずに最初の場所に着いた。本当にどうなっているのだろうか？今立っているこの場所は上から見ても確実に5分で着くような長さでは無かったのに・・・。テイルも降りてきて不思議そうに首を傾げている。大きくなってもしんな所は可愛いままだ。

外に出て見上げてみてもやっぱり30分も掛かるような高さには思えなかった。どころか降りた時と同じくらいの時間で着くような高さ。考えても分からないものは分からないと思いを打ち切り神殿を後にした。

「何だったんだろうね？あの神殿・・・」

「ガウゝ・・・」

「・・・まあ、いいかな？ 行こうか、テイル！」

「ガウ！」

さて、次は何が見つかるかな？

暗闇の洞窟

「あの！わたしも一緒に連れて行って下さい！」

不思議な神殿を後にしてから数日。あれからは面白いことは特に見つからなかった。今日は久しぶりにちゃんとした街道を歩いていたが、途中で馬車が襲われているのを見つけた。私達の通り道でもあったからついでに倒した。殺しては居ない。どうして人間なんかの為に手を汚さなければいけないのか？勿論テイルにも手は出させていない。私以上にテイルに人間なんかを殺させる訳にはいかない。

馬車には女の子が乗っていて、護衛の騎士らしき人物が2人いたがどちらも死んでいた。女の子は何故かそんなことを言ってきた。言って置くけど一々見た目の説明なんかは面倒だからしない。少しだけ言うなら青い髪に赤い目。服は上質なんじゃないか？

「テイル、どこに行く？」

「ガウ」

「分かった。それじゃ行こうか？」

テイルが指さした方向へ向かう為に街道を外れて道無き道と言う程ではないけど整えられていない道を進み始める。暫く進むと洞窟が見えてきた。中は暗くて何も見えないけど、テイルはしっかり見える様だ。でも、なんだか様子が可笑しかった。中を見る・・・と言うより睨んでいる。何かが有るのだろうか？この中に・・・。

「テイル、どうする？ 中に入る？」

「……ガウ」

「分かった。それじゃ、道案内はよろしくね？」

テイルの背に乗り中に入る。入り口はすぐ後ろにあると言うのに一寸先も見えない闇が広がっていた。テイルはそんな中でも迷うこと無く進んでいく。中は下に向かっていてのか少し体が前に傾いていた。暫く進むと急に周りの空間が広がった気がした。そこはまた一段と暗くて本当に何も見えない。テイルから降りて指先に魔力を集め最近練習をしている雷の魔法を指先に作り出す。少しずつ注ぐ魔力を多くしていき、多分ち中央だと思われる場所の上空に向かって飛ばした。一瞬だけこの空間が照らし出され、中央辺りに何かが居た。

本当に一瞬だったけど、私はその姿を見ただけで嫌な感じがした。ここには居たくない。早くここから逃げ出したい。この世界に来て初めてこんな感情に駆られた。テイルは何かを感じているのかずっと正面を睨んだまま唸り声を上げていた。

「テイル、ここから出よう。私はここには居たくない。早くここから出たい」

「グウウウウ……」

唸り声を上げながらも私の声は聞こえている様で背中に私が乗ったことを確認すると警戒したままゆっくりと後退し始めた。その瞬間何かが動いた気配がしたけど、そんなことを認識する前に吹っ飛ばされた。神から貰った力のお陰でこれ位で死にはしないが、痛

いことには変わらない。とにかく、相手の姿が見えない以上うかつに動く訳にはいかない。結界を張ってまた来るであろう攻撃に備える。テイルもそれが分かっているのか、この空間で動く気配は無かった。

そして攻撃もいつまで経っても来なかった。

まさか、音で居場所を特定しているのだろうか？そうだとしたら・・
・。結界を解除して右ての人差し指に水の魔力を集めて其れを右に向かって発射した。少しの間が空いてバシャ！と言う水が弾ける音が聞こえた。それと同時に何かが動く気配がして壁にぶつかる音が聞こえた。

「テイル！」

「ガアアアアア！」

——ゴアアアアア

羽ばたく音と近くを通る音が聞こえて次の瞬間黒い炎を吐き着ける音が聞こえた。それで終わったかは分からないが、逃げるなら今しかない！テイルの背中に乗り降りてきた道を今できる限りのスピードで飛んで貰って外へ向かう。出ると眩い光に視界が包まれた。

「眩し！」

「ガウ！」

目を瞑り、なんとかふらつきながらも着地したテイルにお礼を言いながら降りて、怪我はしていないようだけど念の為に治癒魔法を掛けておいた。昼食を食べるには丁度良い時間でお腹も空いているけ

ど今は予想外のことに對する疲れの方が大きくて、今にも寝てしま
いそうだった。何とか結界を張って私とテイルは眠りに着いた。

狼のような体をして、色は闇の様に黒い何か。

黒以外の何色も持たない何か。

あれがなんなのかは分からない。

でも、もう————関わりたく無かった。

募る不安

「さっきのは何だったんだろうね？」

起きた私達は今現在夕食の真っ最中。近くを通り掛かった魔物。まだ見たことが無い奴だった。本で見たかも知れないけど、引つかかるところが無いから多分初めて見たと思う。鳥型の魔物なんだけどトゥース鳥とは違って歯がびっしり生えていたりするのではなく翼が3対6翼の鳥で目は黄金だった。色は青。首元は白い毛に覆われている。大きさも今のテイルと同じくらいだから2メートル弱。寝ていた私達を攻撃しようとしたみたいだけど、生憎結界に弾かれてその時起きた私が火で倒した。

私達が話しているのはさっきの洞窟で遭遇した何か。関わりたくないとは思っても気になってしまうのは仕方無いことだろう。テイルに何か関係が有るのかも知れないんだから。あんなテイルは初めて見たからそれも手伝って何かの正体が気になる。ただ、テイル自身も何故あんなに警戒したのか分からないらしい。理由を聞いても首を横に振って、声からしても本当に分からないと言った感じた。

「あの何かについても、前の神殿についても、どこかで分かるかも知れないけど・・・できればあの洞窟には行きたくないな。神殿の方は気になるけど」

「ガウ」

「でも、洞窟にいた奴があなたと何か関係が有るかも知れないなら、知っておかないと駄目だよな？テイルも知りたい？」

「ガウ！」

「うん。それなら次は一旦街に向かおう？ 図書館みたいな場所があれば何か分かるかも知れないし、何より食料も買い足さないとけないからね？」

「—————！」

まだ居たのか？ 朝に襲われていた馬車に乗っていた奴がまだ私達を追いかけてきていた。何かを叫んでいるがこれは遮音の結果だ。何を言っても意味がない。テイルは私の横でつい今し方最後の一切れを食べ終わった。何かご飯の代わりになるものって無いかな？ テイルを見ながらぼんやりと考えて結局分からないから神に聞くことにした。

『久しぶりだね？ 茜』

『そうだな・・・名前を呼ばれたのも久しぶりだ。早速だけど、シヤドー・ドラゴンて普段はどんな物を食べてる？ 今の食生活でテイルの腹が膨れるとは思えないけど、テイルはある分しか食べないから。私としてはもっと我が儘を言って欲しいんだけど・・・大きくなって精神面も成長したからなのか全然そんなこと言わなくて・・・』

『・・・そうだね・・・今の食生活が悪いと言うわけでは無いんだろう？』

『うん。魔物ばかりだけど何とか・・・』

『それなら大丈夫だよ。その肉を喰らうと同時にその魔物が持つ魔

力も一緒に食べてるってことだからね。魔物にもよるけど・・・今のテイルはどれくらい大きさに成長した？』

『2メートル位だけど？』

『魔物が主食になり始めたのはいつ頃から？』

『えっと・・・2の街を出て暫くしてからだから・・・多分1ヶ月位前から』

『その1ヶ月でテイルは急激に成長しなかった？』

『あ！うん、した！街にいた頃はほんの少ししか成長しなかったのに、この1ヶ月で急激に！』

前にも言った通りテイルは1ヶ月で急激に大きくなった。街にいた頃とは明らかに成長速度が違うから成長期ってすごいなく、って思ってたけど、どうやら違うみたいだ。多分魔力を食べていたからその分成長が早まったんだと思う。

『だろ？それなら何も心配なくていいよ？』

『うん。分かった、ありがと』

『それじゃ・・・』

神との通信を終えて隣で私を見ているテイル（駄洒落じゃないよ？）が何か言いたげな目をしていた。何か・・・寂しいというかそんな感じの目。どうしたのかな？今までテイルがこんな目をしたことは起きている時は無かった。

「どうしたの？ テイル」

「ガウゝ・・・グウ・・・」

抱きつきながら問いかけるとテイルも甘えるように擦り寄ってきた。そう言えばこんな風にしたのは久しぶりだな・・・だから、寂しかったの？ ごめんね、気付いてあげられなくて・・・あなたはずっと隣に居て私を助けてくれていたのに。

「ごめんね、テイル。そうだね・・・大きくなってまだまだ、あなたは子供なんだよね？ だからテイル、あなたはもっと我が儘を言って良いんだよ？ 私にとってあなたはどれだけ大きくなって子供なの。だから、もっと甘えて？ 2の街に居た時みたいに・・・ね？」

「ガウゝ・・・」

精神面も成長したのかと思ってたけどそんなことは無かった。テイルはまだまだ子供。成体が大きいから、子供でも大きいだけなんだ。今の大きさと前みたいには出来ないけど、それでも、もっと甘えて欲しい。

「ガウゝ・・・ガウガゝ・・・」

「ふふ・・・可愛い所はそのままだね？ 今日はどう処にも行かずにずっと、こうしていいようか？ 急ぐ旅でもないし」

「ガウ！」

それから夜までテイルはずっと私に甘えていた。顔をぺろぺろしてきたり胸に顔を埋めようとして鎧にぶつかったりもして、鎧を外すと今度はちゃんと埋めてきた。私はそんなテイルを撫で続けた。本当に可愛いのはそのままだ。

「ずっと・・・このままなら良いのにね？」

「ガウウ・・・」

テイルもそう思ってくれている様で嬉しかった。でも、テイルはその内成体になって今より遥かに大きくなる。それは仕方ないことだって、分かってるけど・・・やっぱり少し寂しいかな？

今はもうすっかり夜が来ていて私達は寄り添い合ったまま横になっている。こうするとテイルの成長が如実に分かるんだよね。腕の中に収まっていた小さな体は私の身長なんかでは足りない程に成長して、遅しくなった。でも、やっぱり子供でそんな所が愛おしい。

まだ会って3ヶ月位しか経ってないのにテイルは私にとってかけがえのない存在になった。もし、テイルと引き離されたら私の心は壊れてしまうかも知れない。それ位にテイルの存在は大きい。水龍にテイルが何故人間と共にいるのかと聞かれた時、テイルがもしあの男達に殺されていたらと思うと、そう思う度に怖くなる。水龍と会った時から偶にそんなことを考える時があって、隣にテイルが居ることを確かめて、その体を抱き締めた。

そして目が覚めてテイルが居ることに酷く心が安らいだ。本当に怖かった。

もし、ずっと1の街に居たら。

もし、遅れていたら。

もし、違う時間にあの場所を通って居たら。

もし、あの場所を通らなかったら。

もし、テイルが追われていたのが違う場所だったら。

そんな考えばかりが浮かんでしまった。

でも、テイルは今確かに私の隣に居てくれている。もしかしたらいつかテイルはどこかに去って行くのかも知れないけど、今は確かに隣にいる。それだけで、私には十分だ。

初めて剣で魔物を倒した日、私はテイルとずっと一緒にいると誓った。

テイルもそれに答えてくれた。

それでも不安は募る。

いなくなるんじゃないか？

嫌われるんじゃないか？

———永遠の別れが来るんじゃないか？

私はテイルをギュッと抱き締めた。

計画

「ガウ」

翌朝私はテイルの声で目を覚ました。挨拶をして水で顔を洗って周りの状況を確認するために見回して見ると、結界が解除されていた。心が不安定だったからなのかな？今までこんなことは無かったから分からないけど、多分そうかも知れない。初めの頃起きたばかりの時に水を出そうとして危うく窒息しかけたのは、今ではいい思い出・・かな？取りあえず襲われることは無かったみたいだけどこれからは気を付けないと。

「あの！」

「・・・？」

声がした方を見ると昨日の女の子が居た。よく生きてたな？武器なんか何も持っていない癖に。もう一度遮音の結界を張り直して朝食の準備をしようと思ったが、食料はもう無かったんだよね。仕方なく結界を解いてテイルと一緒に近辺を回って食料を探し始める。

「あまり居ないね？」

「ガウ・・・」

20分程歩いたが中々見つからない。もつと居ると思っていたけど、この辺りは少ないのかな？よく知らないけど・・・。何体かいるにはいるけどこちらを見た途端に逃げてしまうから魔法を使う暇も無いんだよね？いくら無意識レベルまでになったとは言っても、見え

てなければ使おうと思うことすら出来ない。気配も常に探れる様にならないといけないか・・・暫くはそっち方面で行こう。

結局見つかったのはアークロンが1体。他には逃げられた。その場で火で焼いて3等分くらいに分けてから、私は少し食べて残りは全てテイルに上げた。元々私はあまり食べる方じゃないから十分足りる。テイルは大きくなるにつれて食べる量も増えて行くけど・・・やっぱりそろそろ街に行かないとね？

それから――

「いい加減にしろよ？お前・・・昨日からずっと後を着いてきて・・・」

「！あなたが・・・わたしの話を聞かないからじゃないですか」

「どうして聞かないといけない？そもそも何の関係も無いんだ。私達の時間を邪魔するな」

「あなたたちの時間？その魔物という時間ですか？」

「遮音・展開」

――キン

「！」

これ以上話すと殺してしまいそうだ。テイルをそこらの魔物と同じように扱う奴の声は耳に入れたくない。私達の時間を邪魔している時点で殺してしまいたくなりそうなのに・・・。

朝食が終わって結界を装備型に変えてテイルにも展開した。以前使った時テイルは寝ていたから分らなかったけど、この結界は遮音状態でも、私が拒絶しなければ声は聞こえるからテイルとも会話することが出来る。食料を補充するため私達は街道を歩き始めて何処に有るか分からない街に向けて歩き出した。

それから数日後の夜。私達は4の街に到着した。3の街は飛ばしちやっただけ別に問題は無い。テイルには不可視の結界を掛けた。出来るかどうか分らなかったけど、「不可視」と付けると出来た。今の大きさを街に入ると絶対に、騎士やら何やらが来てしまつて面倒なことになるだろう。そうなた全員吹っ飛ばせば良いだけだが、その後が更に面倒になってしまう。

当初の目的通り、先ずは食料を買い込んだ。それに暫くはこの街に滞在するつもりだ。仕事もしないといけないからね。

そう言えば私達が街に入った後、少しして誰かが騒いでいた。何か姫とか言った言葉が聞こえたが気にせず宿に向かった。女将さんに鍵を借り2階の右端の部屋に入りテイルの結界を解いた。この街は殆どの建物が石造りだから、テイルが階段を歩いても大丈夫だ。

「ねえ、テイル？あなたはまだ影に入ることとは出来ないの？出来たら誰にも邪魔されることは無いんだけど・・・」

「ガウ！」

「出来るの？」

「ガウガ！ガウガウ」

テイルは私の影を指さした。

「私の影？でも、大きさが足りないと思うけど？」

「ガウガウ」

問題ないと言っても言うように首を振って、テイルは私の影に溶けるように入っていた。本当に大きさは関係ないんだ？凄いな・・・でもなんか不思議。影の中に居るのに姿が見えるなんて。テイルはすぐに出てきて、どう？と言う感じで私に振り返った。

「うん。これなら大丈夫だね。凄いよ、テイル」

「ガウ」

あの夜からテイルは私によく甘えてくれるようになった。この街に着くまでの数日も、寝る時や起きた時にテイルが密着していなかったことは無い。他にも魔物をテイルが倒した時は飛びついて来るから構えてないといけなくなった。でも、私は最強の肉体が有るから押し倒されるだけで済む。褒めると嬉しそうに鳴いて擦り寄せて来るから、余計に可愛い。

「でも、成体になっても大丈夫なのかな？流石に大きさが違いすぎるし・・・」

「ガウ・・・」

「うん・・・闇属性の魔法で何とか出来るかな？大きな闇を造る

とか・・・どう？」

「ガウガウ」

「其れはいやなの？」

「ガウ！」

「私の影がいいの？」

「ガウガウ！」

「そっか・・・それなら何とかしないとね？あなたが成体になる前に出来るようにするから」

「ガウ！」

それから少し遅めの夕食をテイルが影に入った状態で下に降りて、皿に乗せて部屋に戻り一緒に食べ、お風呂に入った。流石に浴槽にテイルが入ることは出来なかったけど、何とか洗い場には入ることが出来た。旅の途中でお風呂に入れるようにしないとね？体を洗ってから湯船に浸かり疲れを落とし、上がってからテイルの体を丁寧に拭いて、自分の体を拭いたら服を着てベッドに座る。

ベッドにはテイルと一緒に寝られるだけの広さが無かったから床で寝ることにした。横で寝られないならベッドなんて意味が無い。念のため結界を張ってテイルに抱きつき横になる。そのうち部屋にも収まり切らなくなるんだよね？そうになったら毎日夜宿だ。

「一緒に居られるなら何処でも良い」

「ガウ？」

「何でもない。お休み、テイル」

「ガウ」

顔を擦り寄せて来たテイルに更に抱きついて目を閉じるとすぐに睡魔が襲ってきた。やはり疲れは溜まっていたみたいだ。

どこかに住居でも造ろうかな？

私とテイルだけの家を。

レンドキア王国（魔王登場）

「もう、1年か・・・早かったね？」

テイルに問いかけると頷いた。4の街で住居を建てる計画を立てたけど、其れにはまず土地が必要だと思って、面白いものを探すついでに土地も探し始めた。以前、見つけた神殿は文献で調べたりもしたけど、大昔に造られたということしか分からず、洞窟については場所が分かっただけで内部については本当に何も手がかりが得られなかった。

でも、他にもいくつか面白い物を見つけることは出来た。

森を歩いていたらいきなり岩場に居たり、川でテイルとじゃれていたらその水がテイルの形になって襲いかかってきたり、神殿に似た建物に入って少しでも道をそれると入り口に戻されてしまったり等色々あった。これらは全て普通に道を歩いていたら絶対に見つからない場所にあったからどの文献にも載っていなかった。でも、どの場所の大小はあっても魔力を感じたから、もしかしたら魔法か自然発生によって生まれた場所なのかも知れない。あくまで仮説だけど・・・。

時間については今日の朝起きたら神がいきなりおめでとうと言ってきたから、何のことかと聞いたらこっちに來て1年が経ったと言われた。でも、どうせなら後5日経ってから言って欲しかったな・・・。そしたらテイルと会って1年だったのに・・・。テイルはこの1年の間でもっと大きくなると思っていたけど、どういう訳かあまり大きくならず、3メートル位だ。それでも力は順調に高まっていて、炎も格段に大きくなってるからね？本当に頼れる存在だ。

「いつも、ありがとうね？」

「あかねのこと、すき。だから、いい」

「ふふ・・・ありがとう。私もテイルが大好きだよ？」

それからテイルがすこし話せるようになった。以前の水龍の様に頭に直接ではなく声にだしてだ。通常他の龍族も水龍の様に頭に話かける様だけど、テイルは私。つまり人間といたから言葉を自然と覚えたんじゃないのか？と神が言っていた。今の所テイルの様に話せる龍族はいないらしい。後、声を聞いて始めて分かったけど、テイルは女の子だった。

「それじゃ、そろそろ出発しようか？」

「わかった」

今日も朝食を食べて面白い物探しに出発。何が見つかるかな？

それからあつという間に2ヶ月。今はレンドキアにいる。理由は何となく歩いていたら近くまで来て、折角だから入ってみよう！ということで入ってみた。すると居たのは流石は魔族の国だけあって、魔族ばかり。羽や尻尾や角があつてみんな楽しい人たちだ。初めて来た私達にもよくしてくれた。宿の紹介や土地や何か面白い物を探していると言ったら些細なことでも、同じようなことに興味を持っている人が教えてくれる。それで今はギルドである人達を交えお食

事中。

「ありがとう。でもいいの？ 貴方たちも忙しいんじゃない？」

「気にするな！ 人間でこんなことに興味を持つ奴なんて殆ど居ないから嬉しいんだよ！」

「そうそう。最初はどんな奴かと思ったが、結構あんた達も面白いからな！」

ギートとマイス。この国で一番私達と接点がある2人。ギートは首もとまである赤い髪に緑の瞳を持ち、背に大剣を付けている。羽は持っていないから邪魔にもならないそうだ。そして、結構な腕を持つ冒険者の男性。マイスは背中まである白髪で目は私と同じ黒。主に魔法を使うらしい。こちらにも男性。ちなみに2人とも私より頭2つ分ほど背が高い。最初は確かになんか不良ぽかったけど、私はそんなことは気にしない方なので、結構すぐに仲良しになった。テイルもこの2人には懐いている。

「それじゃ、俺たちは行くぜ？ またなんか見つけたら知らせるからよ！」

「たまには一緒に仕事行こうな！」

「うん！ ありがとうね！ ギート！ マイス！」

「ありがとう！」

2人を見送って貰った資料に目を通すとそこには最近見つかった神殿のことが書かれていた。何でも上にはすぐに着くが、下にはいく

ら歩いてもしけない階段がある神殿。

あの神殿の反対だ……。下にはすぐに着くのに、上にはいくら登っても着かない。ここを調べたら何か分かるかも知れない。

「行ってみようか？ テイル」

「うん」

代金を机において外に出て、念の為に食料を買い足しておこうと店へ向かおうとしたらドン！と誰かとぶつかった。あまり衝撃は無かったけど、相手は体が小さかったせいかな転んでしまい尻餅をついてしまった。まだ小さな子供だ。私や日本にいる誰よりも黒いのではないかと思う程の漆黒の黒髪を背中まで伸ばしていて、瞳は右が青で左が赤のオッドアイ。服は白いワンピース。角は無いけど尻尾があった。羽は位置の関係上見えない。

「大丈夫？ ごめんね、気付かなくて……。どこも痛くない？」

「・・・あ・・・あう・・・えと・・・だい・・・じょ・・・ぶ。こっちこそ、ごめん／＼／」

「よかった・・・テイル、この子を家まで送るから神殿にはその後に行こうと思うんだけど・・・いい？」

「あかねといられるなら、なんでもいい」

「ありがと。大好きだよ？」

「わたしも、あかね、だいすき」

「それじゃ、あなたのお家はどこ？送るから、教えてくれる？と、その前に自己紹介しておくね？」

私はアカネ・ユキト。この子は大切な家族の・・・」

「ている」

「よろしくね？あなたの名前は？」

「・・・・・・ラムネ／＼／」

「ラムネちゃん、お家はどこ？」

倒れているラムネちゃんを抱き起こして、そのまま抱える。目線を合わせただけで顔を真っ赤にして俯いてしまった。恥ずかしがり屋さんなのかな？

その後、家の場所を聞いて、その方向に向かっていくと大きな城が見えてきた。周りには高級そうな家々もある。ラムネちゃんは貴族とかそんな生まれなのかな？今だ腕に抱えたままそんなことを考えながら、テイル達と歩いて居ると城に着いた。

「ラムネちゃんの家ここなの？」

「そう／＼／／」

「おおきい」

「本当だね・・・もしかしてラムネちゃんて、王様かなんかだったりするの？」

「うん・・・わたし、この国の魔王／＼／＼」

「え？そうだったの？凄いね？まだ、小さいのに」

「すごい」

ラムネちゃんのフルネームは『ラムネ・ル・レンドキア』と言うそうだ。成る程、名前に国名が入っているなら確かに王の証にはなる。それに、神も恥ずかしがり屋だって言ってたし。中に入れて貰うと、護衛の人達が来てラムネちゃんが無事帰ってきたことを喜んでいた。そして、何故か私達まで感謝された。特に何もしてないんだけどね？

それから、ラムネちゃんを護衛の人に預けて私達は神殿を調べに行った。

またね？ラムネちゃん。

「さて、今度こそ出発しようか。テイル」

「うん」

何が分かるかな？

神殿く七色の剣く

「ここだね・・・何か分かるといいけど」

街を出て、から2時間程歩いて辿り着いた神殿は以前に見た神殿と同じような外観をしていた。地下だから分からないけど、やはりこの神殿も上に行くとしたら物の5分も掛からないと思う。今回調べるのは地下だけど、先に上に行くか、下に行くか・・・。

「今回はどっちから行く？」

「うえ」

「分かった。それじゃ、行こう」

中に入り中を観察するとまず目に入ったのは螺旋階段。これは同じみたいだ。また、テイルに乗せて貰って上に上がっていくと、こっちはすぐに着いた。そこにあったのは3つの部屋に通じる扉。正面の部屋に入ると、以前の所と殆ど同じような部屋だった。でも、今回は机の上にノートが置いてあった。また、其れを待っているティルの所に持って行き一緒に中を確認する。

白。

ノートはまた何も書かれていなかった。どのページを見てみても結果は同じ。

鞆に仕舞って他の部屋も確認する。右の部屋には何も無かった。左の部屋には一振りの剣が中央に真っ直ぐ刺さっていた。刀身は蒼く

輝いており、どれだけの時間この場に有ったのかは窺い知れないが、錆も刃毀れも無かった。テイルに念の為準備をして置いてと頼みその剣に近づく。そして、私と剣の距離が零になった時、刀身の輝きが蒼から七色に変わった。ただ、七色と言っても虹のような物では無く、様々な色が混ざっているからそう表現しただけだ。確かに虹の色も含まれているけど、黒なども垣間見える・・・。

「あかね・・・」

「今の所は大丈夫だよ、テイル。もう少し待ってて？」

「うん」

心配してくれるテイルにそう言ってから私はその剣を手を取った。その瞬間何かが体を駆け抜けた。それが何だったのかは全く分からない。それくらい一瞬のことだった。・・・でも、嫌な感じはしなかったから、問題はないと思う。何かの力を秘めてるのは明らかだから、一応持って帰ってラムネちゃんに見せてみようかな？この国の領内にあるから何か知ってるかも知れないしね？

剣を鞘に入れていた布で包んで抱えテイルに乗せて貰い、今度はそのまま下に向かっていく。

「やっぱり、ここも同じだね？いくら降りても辿り着かない」

「うん。へんなかんじ」

下り初めてそろそろ30分。いつまで経っても下には着かない。地下だからやろうと思えばいくらでも深く出来るかも知れないけど、

深すぎる気がする。いつそのこと飛び降りた方が良いかも。

「テイル、飛ぶ力は残ってる？私も補助するから」

「だいじょうぶ。なにをするの？」

「一気に下まで飛んで、見えてきたら私の風で勢いを殺す。それでも着かなかったら、また調べてみよう？」

「うん。いつでもいいよ？」

「それじゃ、お願い。テイル」

「わかった！しっかりつかまって！」

———バサ！

階段から跳んで翼を広げ勢いよく落下していくテイルにしっかりしがみつく。耳元を何かが通り過ぎるみたいに風が音を立てるのが分かる。どうやら、かなりの速さで落ちているみたいだ。

それから、約20分が経っても、下は見えて来なかった。結構な速さで落下しているにも関わらずだ。それでも、落下していく内に先の空間が何か歪んで居るような感じがした。テイルに止まって貰い、ゆっくりとそこに近づく。

———パリ、パリパリ、パリリリリ

「何だろう、これ？テイル何か分かる？」

「たぶん・・・くうかんをしゃだん、するもの。これがあるかぎり、したにはいけない」

「じゃあ、やっぱりここには魔法が関係しているんだ。取りあえずこれをどうにかしないと・・・少し魔法をぶつけてみようかな？ テイル、少し離れて？」

「うん」

少し上に移動して、念の為に結界を張り、中から火を放つ。その火は歪んだ空間に向かい、そこに到達すると忽然と姿を消し、次の瞬間こちらに飛んできた。結界に当たりバチ！と音を立てて火は霧散した。良かった、結界を張って置いて・・・。

でも、魔法による破壊は出来ないなら、今の私じゃ何も出来ない。

次はテイルにやって貰った。黒い炎を歪みに向かって放ったが、やはり返ってきた。また結界に当たり音を立てる。

「どうしようか？」

「・・・・・・・・さっきのけんは？ なにかできるかも」

「あ、そうか。やってみよう。テイル、しっかりキャッチしてね？」

「まかせて」

「ありがと」

もう少し離れて貰って、剣を包んでいた布を解いて剣を右手に構え、

テイルの上から飛び降り歪みに向かって振り下ろす。

歪みに触れた瞬間刀身が一際強く輝きを放ち、ザン！と確かに何かを斬った感触があった。テイルにキャッチして貰って、また背中に乗る。そのまま下に向かっていくとすぐに下が見えてきた。着くギリギリまで落下して貰って直前で風を造りだして勢いを殺して着地する。

「この剣・・・何なのかな？」

「わからないけど、それのおかげでたすかった」

「そうだね。さて、早速調べてみようか？」

「でも、あかね。ここ、まえのとおなじにおいがする」

「てことは繋がってたんだね。それが、さっき切った歪みの所為で断たれていた。まずは下を確認してみよう？」

下に降りて、正面の扉に入り中を確認する。そこは確かに以前見た部屋だった。外に出て上に行き、今度は外を確認すると、周りは森だった。

「こんなに遠い場所を繋ぐなんて・・・誰なんだろう？こんなことをしたのは？」

「わからない。でも、これでいどうが、はやくできるようになった」

「・・・それもそうだね。戻ろうか？歪みが無くなった今なら、すぐに帰れるだろうから」

「うん」

中に戻り螺旋階段を上に乗っていくと、下にいくよりは時間が掛かったけど、すぐに上に着いた。念の為、上に登り左の部屋に入り床を確認すると、確かに剣が刺さっていた穴があったから間違いない。2つの神殿は繋がっていた。誰がどういった目的でやったのかは分からないけど、それが分かっただけでもよかった。

「帰ろうか？そろそろお腹が空いたでしょ？」

「うん。おにくが食べたい」

「ふふ。いいよ、沢山食べて・・・でも食べ過ぎたら駄目だからね？」

「わかった」

その日テイルは記録更新とも言える量の肉を平らげた。

本当に食べ過ぎたら駄目だよ？

可愛いけど。

アルカン

「それにしても・・・この剣は何なのかな？」

ここは泊まっている宿の一室。ベッドに背中を預けて座り隣にはテイルが寝ている。剣は危なく無いように左手で持っている。まあ。いくら観察しても分からないけど、この剣が空間を斬ったのは間違いないんだよね・・・。もしかしてこの剣も、あの2つの神殿を造った人が造ったのかな？

そもそも、あの神殿は造られたのかな？

これも考えたって分からないことだけど・・・。このことも含めてまた、調べてみよう。

「さて、今日はもう寝ようかな？テイルはどうする？」

「もうすこし、おきてる。おやすみ、あかね」

「うん、おやすみテイル。あまり夜更かししちゃ駄目だからね？」

「うん」

布に包んでベッドに剣を置きテイルに抱きついて目を閉じる。ふわりと、優しくテイルの翼が体を包んでくれた。その暖かさに包まれて私は眠りに落ちていった。

「……ここは？……あれ、どうして剣が？」

ふわふわと、体が浮いているような感覚に目を開き、周りを見るとあの剣が浮いていた。そこで気付いたけど、私も浮いていた。なんか不思議な感覚だな……浮いていることも含めて、この場で感じる感覚が。その感覚がなんなのかははっきりとは分からない。でも、剣から発せられていることは分かる。ここに居るのは私と剣だけだから。

それにしても……この感じ、どこかで……あ！神殿で触れた時に感じたのと同じだ！それでも何なのかは分からないけど……。また触れて見れば分かるかな？でも、どうやって進めば良いんだろう？手を伸ばして届く距離じゃないし、浮いてるから歩けないし……進め……って念じれば良いのかな？

お？あれ？ホントに進んでる？こんなんでいいの？

と少し混乱している間に手を伸ばせば届く距離まで近づいていた。そこで止まったから、私は剣に触れてみた。すると声が聞こえた。何処までも澄んでいて、吹き抜ける風みたいだな……そんな声。

『久方ぶりだな？七色の覇者よ』

私はその言葉が分からなかった。分からないと言っても違う言語と言うわけでは無い。込められている意味が分からなかったのだ。こんなにも綺麗な声なら、一度聞いたら私は絶対に忘れない自信がある。本気でそう思うほどに綺麗な声だ。

「どういうこと？私は貴女みたいな綺麗な声をした人と会ったことはないよ？テイルはどっちかと言うと可愛いつて言う方が正しいし・・・ラムネちゃんは鈴みたいに静かな声だし」

『本当に分からねぬのか？永い時を共にしてきた我のことが』

その声から伝わってきたのは悲しそうな感情だった。そんな声は出さないで欲しい。こっちまで悲しくなる。

「そんな感情は止めて？私まで悲しくなる・・・」

『・・・すまぬ。どうやら本当に分からねようだな？こんなにも同じだと言うのに』

「同じ？何が同じなの？」

『以前の主人。バルハイト・ズイーデル。お主の持つ力はあやつと同じだ。永年共に居た我が本人だと思いこんでしまう程にな？・・・さて、人違いと言うなら自己紹介せねばならないな？

我の名はアルカン。お主は？』

「私は、アカネ・ユキト。よろしくね？アルカン」

『うむ。これからはお主が我の主人だからな。よろしく頼むぞ？アカネ』

「え？そうなの？」

『ああ。我はお主を主人と認めたからこそ、ここに連れてきたのだからな？』

「そうだったんだ・・・まあ、頑張るね？」

その後、私達はいろいろな話をした。その話の中で分かったけどこの空間はアルカンが造った空間らしい。そして私が魔力を込めればこの空間の中でだけ、人の形を取れるそうだ。そして、ここに来た時は寝る時に体のどこかが触れていれば良いらしい。

それから私を主人と認めたのは、最初は間違えて、と言っていたが話している内に本当に主人として認めてらえた。私が見た時に分らなかったのか？と聞いたら、剣の状態では魔力を感じることは出来ないらしい。だから、私がバルハイトさんだと思ったとか・・・。

「はは・・・っ・・・あれ？なんか、意識が霞んできた・・・」

『目覚めが近いのだろう。済まなかったな？つい話し込んでしまった』

「ううん、私も楽しかったから。それじゃ、改めて、今日からよろしくね？アルカン」

『うむ、よろしくな。アカネ』

私の意識はそこで途切れた。

ぺろ・・・

「ん・・・？・・・あ、テイル。おはよう」

「おはよう、あかね」

頬を舐められた感覚に目を開き、テイルに挨拶をする。洗面所で洗顔と歯磨きをした後、テイルにアルカンのことを話した。

「いまは、はなせないの？」

「あ、どうなんだろう。声は聞こえてると思うけど・・・。アルカン、話せるなら何か話して？テイルにも聞こえるように」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

暫くの沈黙。

「あの空間じゃないと無理みたいだね？今晚寝るときにテイルも一緒に、アルカンに触れて寝てみようか？そしたら、一緒に行けるかもしれないから」

「うん。すこし、たのしみ」

「そうだね。それじゃ、ご飯を食べて仕事をしに行こうか？家を買うためにもお金は必要だからね？頑張ろう！テイル！」

「うん！」

稼ぐぞー！

蓄えはまだ十分あるけどね？

貯金があるに超したことは無いでしょ。

アカネとラムネく初めての殺意く

「あ、見てみて、テイル？ Bランクに上がれるよ？」

アルカンの主人として認められてから、早1ヶ月。仕事を続けて居る内にいつの間にかBランクになれるまでになっていた。それと、テイルはアルカンの空間に無事入ることが出来た。私が心を開いていれば誰でも入ることが出来るみたいだ。ついでにアルカンの人の姿を見たくて、魔力を注ぎながら寝たけど、驚くほどに美人だった。

腰まで伸びた蒼い髪と私と同じ黒の瞳。背は私よりも2く3く高い位で、服はワンピースかな？ スタイルはバランスが取れている。スレンダーだよ？ 言ったら怒られた・・・気にしてるんだね？ 分かるよ、私もだから・・・。

神殿のことについても聞いたけど、アルカンは何も分からないらしい。バルハイトさん・・・長いからバルさんで良いかな？ と別れてからは自身も良く分かっていないようで、気付いたらあの部屋に居たみたいだ。どういうことなんだろう？ 意思疎通が出来るなら、その辺も説明しても可笑しく無いと思うけど・・・何か事情があったのかな？ 今となっては確かめる術も無いことだけど、気になるな。

あ、アルカンの力について説明しておくね？

最初青かったのに私が触れた瞬間七色になったのは、魔力を1つに限定していなかったとのこと。どういふことかと聞くと、私が火の魔力を使いながら触れれば赤に、水なら青に、風なら翠と言った具合にその時々、使う魔力によって変わる。会った時に青かったのは、気分だって・・・。

えっと・・・色が変わると攻撃の方法もそれに合わせて変わる。

赤なら炎を纏い敵を焼き、青なら水を発生させ敵を飲み込み、翠なら風を放ち敵を断つ。

上手く使いこなすことが出来れば、それだけで全ての攻撃を放つことが出来る。今の私だと、精々3つを同時に纏わせる位しか出来ないけど、大いに助かっている。テイルも居てくれるから、それに赤で合わせると合体技にも出来る。見つけたのは偶然だけど、今はそれも含めて練習中。

その過程でいつの間にかBランクに上がれるようになりました。

「これで、報酬が格段に上がるね？順調に貯めていけば来年くらいには家を買うかも知れないよ？」

「ほんと？うれしい」

「うん！そうする為にもこれからも頑張っていこう！」

「がんばる！」

本当に可愛いな・・・。

あ、テイルはこの1ヶ月も余り大きくなっていない。ほんの数ミリ程度だ。どうしてなのかな？テイルは会った時には50〜60？位だったけど、それから3ヶ月程で大分成長した。抱っこが出来なくなっただけ落ち込んだのは今でも鮮明に覚えている。あの時は本当に残念だった・・・。

少しずれたけど、今では殆ど大きくならない。依然、3メートル位・
・・テイルはこのままで良いのかな？この先大きな敵と戦うことになった時、やられてしまうんじゃない？ううん、そうならない為に私がテイルを守る。その為にももっと強くなりたいと。

アルカンにも恥じないように。

ちなみに今居る場所は、ラムネちゃんの部屋です。

今は変えてってくるのを待っている状態。

え？何故かって？それが私達も良く分かりません。何をして待っていれば良いのか分からなくて、何となくギルドカードを鞆から取り出して見て、さっきの話になる。

えと・・・取りあえずここに来るまでの経緯を説明するとね？

（約30分前）

起きてから取りあえず外に出て、

「さて、どこか行こうか？テイル、アルカン？」

今日の予定を決めようと思って、聞いたけど、

「どこに？」

「・・・・・・・・どこか？」

どこも浮かばない。

「あかね・・・」

テイルに呆れられちゃったよ・・・うう・・・。

くいきい・・・。

「・・・・・・・・ん？」

落ち込んで居ると、スカートを弱々しく引っ張られ、見てみると

「こ、こんにちわ／＼／」

頬を朱く染めたラムネちゃんがいた。恥ずかしがり屋なのは生まれつきかな？

「こんにちは。久しぶりだね？ラムネちゃん、どうしたの？」

「・・・・・・・・えと・・・・・・・・アカネに・・・・・・・・会いたく・・・・・・・・て／＼／」

「わざわざ探してくれたの？」

「・・・・・・・・うん／＼／」

「そっか、ありがとう。大変だったでしょ？ほら、おいで？抱っこ

してあげる」

両手を広げて、おいでと言うと、相変わらず頬を朱く染めたまま、遠慮がちに、ぽすと腕の中に収まった。その体を抱き上げて目を合わせると、少しの間見てくれたけど、

「・・・・・・・・（ボン！）／＼／＼／＼／」

と音を立てて顔を伏せてしまった。

うわああああ・・・可愛い！何かテイルみたい。テイルはもう抱っこ出来ない大きさになっちゃったからね・・・本当に懐かしい感覚。

「あかね」

「ん、何？テイル？」

「わたしも」

少し不機嫌そうに言ってくるテイルも可愛い。

「うん。ほら・・・ギュー！」

ラムネちゃんを片腕に抱いて、片腕をテイルの首に回す。

「あかね、くるしいよ」

そう言ってはいるけど、声は嬉しそうだった。暫くその場で抱き合っ
て居ると、不意にラムネちゃんが口を開いた。

「・・・アカネ、これから・・・家に／＼／」

「ん？」

「・・・家に・・・家に・・・来てくれませんか！／＼／」

最後の方は余程ラムネちゃんにとって勇気がいったのか、声が裏返っていた。本人は必死で気付いてなかったみたいだけど。

「うん。いいよね？テイル？」

「あかねがいいなら、いい」

「ありがと。という訳で、ラムネちゃん」

「・・・は、はい！／＼／」

「喜んで」

「ホント！」

余程嬉しかったみたいだ。どうして私達を招待してくれるのかは分からないけど、してくれるのなら喜んで申し出を受けますとも。

と言う訳で城に来て部屋に通されてから約30分。

「ラムネちゃん、どうしたのかな？」

「わからない」

ずっと待ってるけど、来ないんだよね・・・何かあったのかな？心配になってきた。

「探しに行こうかな？魔力を探せば見つけれられるかも」

——コンコン

探しに行こうと立ち上がると同時にノック音が聞こえて、見ていると、ラムネちゃんが入ってきた。自分の部屋なのにどうしてノックしたのかな？もしかして間違えた？

「ラムネちゃん？どうしたの？ノックなんかして？」

「・・・えと・・・緊張・・・しちゃって／／／」

「ふふ。ここはラムネちゃんの部屋だよ？緊張なんてする必要無いと思うけど？」

「・・・アカネ・・・が・・・いる・・・から／／／」

言いながら私達の元まで来たラムネちゃんは、再び座った私の膝の上にちょこんと座って、背中を預けてきた。頭を撫でると、擦り寄せて来る。それから、どうして私を探していたのかを聞いた。家に呼びたい、と言う理由意外にも何か有るかもと思ったから。

それで、どうやら他にも理由はあったみたいだ。

前にも言ったけど、ラムネちゃんはこの国の魔王を務めている。まだまだ、子供なのに魔王が務まると思うことは、それだけの力を持っているからだけど、子供故に狙われることも多い。ラムネちゃんはこれまでの短い人生の中で、そんな汚い者達を見てきた。

だから、基本始めて会う人には警戒心を抱くみたいだけど、私は何もしなかった。最初はそのことに着いて警戒をしたらしい。油断させて命を狙っているんじゃないのか？って……。でも、私は魔王がいるのは知っていたけど、それがラムネちゃんだなんて知らなかった。すぐに分かったけどね？なんでこんなに可愛い娘を狙うのかな？

順序は逆だけど何故、ラムネちゃんが魔王を務めているのかと言うと、先代の魔王が急な病に侵され命を落としてしまったから。腕の良い治療魔術師に看て貰ったけど、結局手の打ちようが見つからないまま……。

私はラムネちゃんを抱き締めた。

「！あ、アカネ／＼／」

「ごめんね？驚かせちゃって……。でも、今の私にはこれくらいしか出来ないの。本当にごめんね？」

「あかね」

「…………ううん……。ありがと……。アカネ。嬉しい、よ？だから、もう少し、このまま……」

「うん」

私はラムネちゃんを抱き締め続けた。

隣でテイルが見守ってくれている中で……。

「……また……来てくれる／＼／」

「勿論だよ！それと、何かあったら、いつでも来ていいからね？当分はあの宿に泊まってるから」

「……うん／＼／」

「それじゃ、またね？ラムネちゃん」

「……またね／＼／」

ラムネちゃんに玄関まで見送って貰い、宿に戻る途中。

「テイル。ラムネちゃんを狙う奴らが居たら、そいつら——」

「……」

「殺すから」

「わかった」

こっちに来て・・・いや、生きてきて始めて、誰かに殺意を覚えた。

旅立ち

「覚悟してね？」

いきなりで何だけど、取りあえずラムネちゃんの家には招待された日からのことを説明するね？

面白い物も最近は余り見つけられず、ひたすら仕事をしていた。その甲斐あって、お金は私生活には問題無いくらいには貯まった。ギートとマイルとも偶に仕事に行くようになって、その時に国の内情に付いて少し説明してもらった。

2人は色々な所から情報を集めることが出来るから、国のことについても多くのことを知っていた。勿論、魔王のことも……。そこで聞いたけど、先代の魔王は誰かに呪いというか、そんな感じの物を掛けられた影響で床に伏せてしまったみたいだ。医師達が分からなかったのは、そのまじないを掛けた犯人がその中に居たから。すこし考えればすぐに分かることだったね……。

「ラムネちゃんを狙っている奴も、その中に居るの？」

「ああ、居る。誰かは未だに特定出来ないが、確実にな？だが、そいつをどうにかしよう何て考えるなよ？お前じゃ齒が立たない」

「そうだな……。確かにテイルは居るが、それを踏まえてもお前じゃ勝てないだろう」

「そっか……。勝てる云々は置いておいて、見当は付いてるの？」

その質問にギートは少し間を開けて、護衛隊長が一番怪しいと言っていた。帰ったら観察して来よう。訓練とかしているなら其れを纏めている奴がそうだろうし・・・ついでにどれくらいの力を持っているのかも見ておかないと。

仕事から帰ってきて報酬を山分けして、解散し、それぞれ泊まっている宿に向かう。今は昼を少し過ぎた辺りだけど、まだ昼食中だったりするかな？ 見えない様にするから何も問題は無いけどね？

テイルにも付いてくるか聞いたら即答して、付いてくことになった。城が建っている辺りに来て、周りに誰もいないことを確認してから不可視の結界を張り城の中に入る。どこで護衛の人達が訓練をしているか、なんて知らないから何処に行けばいいのか迷ったけど、かけ声みたいなのが聞こえたからその方向に向かった。

そこではざっと見ただけでも100人位の人がいた。中には女性もちらほらと見える。そしてその集団の前に立ち指示をしている男が1人。多分、そいつが隊長なんだろう・・・他の人とは来ている鎧が違う。説明は面倒だけど、えっと・・・他の人たちは鎧に何も装飾とかは無いけど、そいつのだけ明らかに違った。後ろから見ているからよく分からないけど・・・。

「隊長とは言っても大したことないね。これなら楽勝だよ」

「あかねがやらなくても、わたしがやるよ?」

「駄目だよ、テイル? 貴女が手を汚す必要なんて無い。そんなことは私がさせない」

これだけは何があっても譲らない。

取り合えず夜にまた来て、何か怪しい所が無いか確認しよう。

一旦、宿に戻って夜になるまで適当に過ごした。

「そろそろ行こうかな？」

「うん」

私達はまた城に向かい、不可視の結界を掛けて再び城に入った。

こんなんでよく護衛が務まるね？

隊長の魔力は覚えていたから、其れを辿って歩きある一室の前で立ち止まる。中からは話し声が聞こえた。その内容は

「それでは、明後日の晩に、魔王を殺してくれるのですね？」

「ええ・・・報酬さえ払ってくれるなら、どんな者であろうと、殺して見せますよ？ですが念の為にこちらは、7人で赴きます。寝ていると言え、相手は魔王ですからね？そちらは誰も近づけないよう、頼みますよ？」

ラムネちゃんを殺すことについてだった。その内1つの声は昼に聞いた声と同じ・・・確定だな。数も分かったし、今から城の敷地内で、監視しておこう。律儀に明後日来るか何て分からないし。ラムネちゃんの部屋がある所の屋根に座って、空を見上げると、国の内情なんかとは違って、綺麗だった。

「どの国でも、結局人は人か・・・本当に下らない生き物だな」

「あかねは、くだらなくなんかない」

「・・・ありがとう、テイル」

優しいね？

それから、監視を続けてその夜には来なかった。

次の日も。

そして、今日。時間は夜11時位。

「来るかな？」

どこかで複数の人が動く気配がした。不可視の結界を維持したまま、そいつ等が来るのを待つ。それから約10分後・・・全身を黒いローブで包み簡単な仮面を付けた7人が屋根の上に来た。なんでわざわざ、屋根に来るかな？普通、窓から入ったりするんじゃないの？

まあ、いいや・・・。

「やっと来たね？待ちくたびれたよ」

『! !』

突然聞こえた声に辺りを警戒し始める暗殺者達。

「ここだよ、ここ。分からないの? それで、よく暗殺なんて出来るね?」

「誰だ! ?」

「あんたら何かに名乗って堪るか。と言うわけで・・・」

テイルを残して結界から出る。

そして、冒頭の台詞。

「何者かと思えば只の小娘ですか? 貴方たち、相手をする必要は有りません。魔王を殺しましょう」

「相手の力量も分からない癖に・・・そんなんで、よく暗殺者なんてやれるよね? もう、笑っちゃうよ?・・・しかも、こんな小娘の言葉で苛つきを見せるなんて・・・」

後ろで構えていた4人程が、私の言葉を聞いて肩をピクと揺らした。ホント、この程度で感情に揺らぎを見せるなんて・・・冷静を保てない癖に暗殺なんてするなつての。

「掛かってくるなら、掛かってきなよ?

殺してあげるから・・・」

今の言葉でさっきの4人は完全に切れたみたいだ。リーダーの制止の言葉も聞かずに斬り掛かってくる。

こっちに來たときからずっと抑えていた魔力を解放する。制御できるかどうかなんて今はどうでもいいことだ。こいつ等は絶対に生きて歸さない。

歸してやらない。

「!何だこの魔力は!」

「・・・・・・・・」

解放しないと分からないなんてね? もう、笑いすら出てこないよ・・・。

右手を驚きの声を上げた男に向けて、火を放つ。軽く放ったつもりだったけど、それは今までの比では無かった。テイルよりも大きい。

その火はその男を飲み込むだけでは飽きたらず、後ろの奴らも飲み込んだ。リーダーは防御の魔法でも張っているのか無事だったけど、他の奴らは全て焼け死に、辺りに嫌な臭いが立ちこめる。

「あんた以外、みんな死んじゃったよ? どうするの?」

「・・・・・・・・まさか、そんな力を持っているとは思いませんでしたよ? 仕方ありませんね? 今日は退散「させる訳無いでしょ!」」

今まで出したことが無いくらいの低い声で言うと、リーダーは息を

詰まらせた。殺気も魔力も全てをそのリーダーに集中して放つと、それから一切動かなくなった。

「この程度で、動けなくなるなんてね？それじゃ、殺してあげる・ラムネちゃんを狙ったことを後悔するといいわ」

風を腕に巻き付けるように発生させて、先を鋭利な刃物の様にしていきながら、ゆっくりとリーダーに近づいた。

「・・・ヒ!・・・止めろ!来るな!くる「黙れ」ガア!」

これ以上耳障りな声を聞きたくなくて、一瞬で近づき胸を貫く。叫び声を上げて、その男は息絶えた。

腕を引き抜き、魔力を抑えていくと風も霧散していく。

風を纏って居たから腕は血で濡れることは無かった。

「テイル、もう少し待ってて?隊長を始末してくるから・・・」

「うん」

死体はそのまま放置して中に向かい、一昨日の部屋の前に立ちノックをする。暫く待っていても返事は無かったから、多分寝ているのだろう。さっきの様に風を纏わせ扉を斬って中に入る。結構大きな音が出ちゃったけど、ラムネちゃんの部屋は遠いから聞こえないと思う。

ま、この音で隊長は起きたみたいだけど・・・。

遅いって・・・寝ていても気配くらい分かるようになっての？

「だ、誰だ！お前は！」

「今晚は。隊長さん？よくもラムネちゃんを殺そうとしてくれたね？」

「・・・フ、何のことだ？」

「ああ、いいよ誤魔化さなくて？一昨日ちゃんと聞いたから・・・黙って死んでくれる？」

「今ね？私怒ってるの？せめてあんたを殺さないと、この国すら壊してしまいそうなんだ・・・。」

でも、そんなことしたらラムネちゃんまで危ないでしょ？

だから、護衛隊長のあんたが死ねば全てが丸く収まるんだよね？

いいよね？護衛隊長ってことは魔王と国を守るってことでしょ？

だから————」

腕を振り上げて

「うわあああああああ！！！」

「さよなら、名も知らない隊長さん」

ザシュ！

右肩から左の腰に掛けて斜めに切り裂いた。

血が噴き出して、体に掛かる。

「洗えばいいか・・・帰ろ」

不可視の結界を掛けて屋根の上に戻って、テイルと一緒に宿に戻って眠った。

それから数日。

今日の予定を考えていると、またスカート引っ張られ、見てみるとラムネちゃんが居た。

「おはよう、ラムネちゃん？今日はどうしたの？」

「・・・大事な・・・話があるの。部屋に来てくれる？」

「うん」

今日は赤面することが無かったから、本当に大事な話なんだろうね？この前のことだと思うけど。あの時、少しでも目が覚めていたのなら、多分魔力で分かるだろうからね・・・嫌われちゃったかな？

「あかね・・・」

「大丈夫だよ？ テイル。後悔はしてないから」

何も言わずに歩いていくラムネちゃんの後を付いて行きながら、歩くこと数分。城に着き部屋に通される。今日はラムネちゃんはどこかに行かずに扉の鍵を閉めて、私達と向き合う形で座り、要件を話し始めた。

「・・・最初にお礼を言っておく。守ってくれてありがとう・・・もし、アカネが来てくれなかったら、わたしは今生きて居なかったかも知れない」

「・・・・・・・・」

私は言葉が出なかった。

まさか感謝されるとは思ってたから・・・。

「・・・アカネ？」

「あ・・・ごめん。お礼を言われるとは思ってなかったから・・・」

「・・・どうして？ アカネは会って間もないわたしを守ってくれたんだよ？ 嬉しかったもん。それで、次の用件なんだけど、聞いてくれる？」

「うん、何？」

ラムネちゃんの口から出てきたのは私もテイルも全く予測していな

いことだった。

「わたしを連れて行って欲しい」

「「え？」」

揃って間拔けな声を上げてしまう。

「わたしはそこの世界を見たい。だから、アカネ達に付いて行きたいの」

でも、ラムネちゃんの声は至って真面目だ。

赤と青の瞳は真っ直ぐ私を見ている。

そんな真剣に頼まれたら、断れないよ？ラムネちゃん？

テイルに目を向けると、問題無いという感じの目で見つめ返してきた。

それに頷きで返して

「いいよ、おいで？ラムネちゃん、一緒に世界を見て回ろう？」

あの時の様に腕を広げる。

「.....」

一瞬きよとした顔をしたけど、すぐに、満面の笑みを浮かべて

「うん！」

胸に飛び込んできた。

ガン！

「あう！」

「あ！大丈夫！ラムネちゃん！ごめんね！」

鎧にぶつかってしまった。結構な音がしたからね・・・大丈夫かな？

「・・・だいじょうぶ・・・これから、よろしくね！アカネ！テイル！」

良かった、大丈夫みたい。

「「うん！」」

この国がこれからどうなるのか何て分からないけど、ラムネちゃんが無事ならそれでいい。元々、この国の住人じゃない私達には関係が無いし、私達と来る以上ラムネちゃんも国から出て行くことになるからね？

「それじゃ、準備をしたら早速行こうか！」

「うん！もう出来てるよ！」

「え、そうなの？早いね？でも、荷物は？」

そう言うラムネちゃんの周りを見るけど、何処にも荷物らしき物は無かった。

「空間に仕舞ってるの。制限が無いからいくらでも入るんだよ？ほら」

と言って右腕を横に伸ばすと、その腕がどこかに入っていく、出てきた時は大きな鎌を持っていた。便利だなく・・・私にも使えないかな？

「アカネ達の荷物も入れることも出来るし、お金とかも入ってるから」

「ホントに便利だね？それじゃ、出発しようか！テイル！ラムネちゃん！」

「「うん！」」

私達は不可視の結界を張り、宿の所で私だけ出て女将さんにお世話になったお礼を言ってから、テイル達と一緒にレンドキアを後にした。

「さて・・・これからもっと、面白くなるね？楽しんで行こう？テイル、アルカン。」

そして・・・ラムネちゃん？」

「「おー！」」

次は何処に行こうか？

関係ないか、何処でも楽しめるよね？ 私達なら

可愛いくて優しい2人ゝお家ゲット！ゝ

「・・・えっと・・・おはよう・・・アカネ、テイル／／／」

突然だけど、ラムネちゃんは真剣な話をする時以外は基本恥ずかしがり屋なんだよね。旅に加わって、そろそろ1ヶ月だけど、あの日以降は、ずっとこんな感じ。戦闘の時なんかはそんなことは無いけどね・・・まあ、そんな暇も無いけど。

そんなところが可愛いからいいけどね？

「うん、おはよう？ラムネちゃん。テイルも、おはよう？」

「おはよう、あかね、らむね」

あ、それとね？前回ラムネちゃんが空間から鎌を取り出してけど、あれって無制限に入るみたいでラムネちゃんの部屋にあった、ベツドなんかも一緒に持ってきたんだ。しかも流石は魔王だけあって、かなり大きいし丈夫！テイルが寝ても全く問題なしの優れ物！

一気に快適になって今までよりもぐっすり眠れる。

ただ、場所を選ばないと駄目なんだけどね？遣ろうと思えば家もすらも入れることができるみたいだけど、その家が今は無いからできるだけ早く買って3人の安住の地を作らないとね！

今も十分平和だけど！

「家ってどこで買えるのかな？」

「・・・5の街に・・・職人・・・が・・・いるよ?・・・ここ・・・から・・・西に1週間・・・位の所／＼」

「そうなんだ? ありがとう、ラムネちゃん。教えてくれて」

そう言って頭を撫でると真っ赤になって、俯いてしまった。

もう! ホントに可愛い!

「それじゃ、準備したら出発しようか? テイルはもうOK?」

「うん」

「ラムネちゃんは?」

「・・・いいよ／＼」

「よし」

その後、ベッドやら何やらをラムネちゃんの空間に仕舞ってごはんを食べてから出発した。

1週間後私たちは5の街に到着した。

早速ラムネちゃんの言っていた、職人さんの店に向かって、中に入ると小柄ながらもガッシリとした体格のおじさんが1人いた。その

おじさんはガートルールさんと言うらしく、1人で家を造れるとのこと。勿論その分時間はかかってしまうけど、腕は確かだから人気は高いようだ。

ガートルールさんに家を買いたい旨を伝えると、未だ誰も買い手が付かない家があるそうで、それでいいなら今すぐにでも買えるそう。どうして、買い手が付かないのか聞いたら、なにかあるらしい。それがガートルールさん本人にも分からないようで困っているそうで、誰かにどうにかしてもらいたいと言っていた。その家はガートルールの傑作でもあるから、尚更困っているみたいだ。

「それじゃあ、それをどうにかすることができれば、その家を買っていいんですか？」

「ああ、本当にどうにかしてくれるならただで譲ってやるぜ？こっちもあの家がこの先ずっと、誰にも住んでもらえないとなると・・・生みの親としては悲しいんだ。頼むぜ？嬢ちゃん達？」

人気が高いのは家に対する情熱が誰よりもあるから何だね？それなら何が何でもどうにかしないと！

「任せてください！行こう！テイル、ラムネちゃん！」

「「おー！」」

勢いよく店を飛び出してすぐにあることに気付いてまた店に戻った。

「どうした？嬢ちゃん？」

「・・・その家ってどこにあるんですか？」

「・・・・・・・・」

あー！そんな目で見ないで！死んでしまいます！

家の場所を教えてもらって鍵を預かって、再度気合いを入れて、教えられた場所に向かう。

暫く歩いて居ると静かな場所に出て、そこには大きな家が一軒建っていた。ラムネちゃんのお城ほどじゃないけど、結構な大きさの家で、私たちでも十分余裕を持って暮らすことができる。

早速なんとか使用と玄関を開けて中に入る。

「・・・玄関は特に何もおかしい所は無いけど・・・テイル達は何か感じる？」

人間の私を感じられないことでも、シャドー・ドラゴンと魔王なら感じることもできるかも知れないと思って聞いて見たけど、どうやら2人も何も感じないらしい。

「嘘をついてるようには見えなかったけど・・・とりあえず、奥に進んでみようか？」

「「うん」」

1階にある3つの部屋を観察して、右の壁際にある階段を使って2階に上がり、4つある部屋を順位見ていく。でも、どの部屋も私たちは何も感じなかった。1階に戻り全体を見ても・・・ん？

「ねえ、テイル？あれ取ってこれる？」

天井の一点で何かが光っているけど、小さくてそれがなんなのかまでは確認できない。

「？・・・うん、だいじょうぶ。すこしまつて？」

「分かった。お願いね？」

「まかせて」

バサツと翼を広げて飛び上がり天井に行って、光っている何かを取ってくる。テイルが加えていたのは小さな鉱石だった。私が見ても分からないから、ガートルさんい見てもらおうと思ったけど、ラムネちゃんが「見せて？」と言うので、渡した。

暫く観察した後、ラムネちゃんは石について説明してくれた。

「この石は、魔力が少ないものを寄せ付けない結界を常時発動する物だよ？多分、これがあるからこの街の住人はこの家に近寄ることができなくて、誰も買えなかったんだと思う。わたし達が入れたのは単純に魔力が桁外れだから・・・アカネは普段抑えているけど、この石は潜在的な力も含めて、作用するから、入れたの。とりあえず、これを外しさえすれば、問題は解決だよ？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・えと・・・・・・・・もう・・・・・・・・大丈夫・・・・・・・・だと思っ／／／」

真剣モードから一転恥ずかしがり屋モード（勝手にそう命名しました）に変わった。

「そっか、ありがとう。ラムネちゃん、これで家が貰えるよ？ ティルも、ありがとうね？ 協力してくれて？」

「あかねにきょうりよくするのは、あたりまえ」

「それでも、ありがとう」

「うん」

「それじゃ、ガートルさんい報告しに行こうか？」

「「うん」」

家を出て鍵を閉めてから、ガートルさんのお店に向かい石を渡して事情を説明する。この石は天井に使っていた材料に最初から付いていたみたいで、深く考えずにそのまま使ったそうだ。でも、そのお陰で私たちはこの家をもらうことができたのだから、感謝だね？

「結局、俺の所為だったのか・・・すまねえな？ 嬢ちゃん達？ 俺が知っていれば、こんなこと頼まずに済んだんだが・・・まあ、とりあえず解決してくれた助かったぜ。」

約束通り、あの家は嬢ちゃん達に遣るぜ！ 好きに使ってくれ！

「え？ いいんですか？ 私たちは石を取っただけなのに・・・」

「言っただろ？ それも結局俺が悪かったんだ。気にせずに使ってくれ！ やっと、あの家にも住んでくれる奴等が現れたんだからな！」

「ガートルさん・・・はい！ありがとうございます！」

「ありがとうございます」

「・・・ありがとうございます／／／」

「おう！何か必要な物があつたら造ってやるからよ！あ、分かっていると
思うが、その時は金取るぜ？」

「ガハハハ！」

「分かってますよ。その時はよろしくお願いします」

こうして私たちはやっと住居を手に入れることができた。

後はベッドなんかをちゃんと整理すれば万事OKだ！

「これからは毎日お風呂に入れるね！テイル、ラムネちゃん！」

「そうだね。いつも、あかねのみずにたよってたから・・・これで、
ふたんもへらせるね？」

「・・・いつも・・・ありがとうございます／／／」

「もう！そんなこと気にしないでいいんだよ！」

2人ともホントに優しいんだから。

これからよろしくね？

可愛いテイルに、恥ずかしがり屋の魔王様！

5の街の情報屋くラムネの優しさく

「何かおもしろいこと無いかな」

家を手に入れて1週間。私たちはとりあえず整理等を行うことにしたけど、建てられてから結構時間が経っていたみたいで、その間誰も住めなかったからこれが思いの外大変だった。ラムネちゃんに水や風の魔法での掃除方法を教えてもらいながらやったけど、1日に全部をするのは疲れるから何日かに分けてしていたら、4日も掛かってしまった・・・。

それから、この街のことを知らうと思って探索をしていた。ラムネちゃんに案内してもらっている内に、誰もラムネちゃんに気付かないことに疑問を感じて聞いてみると

「わたしは置物と同じだから・・・ただ、いるだけで殆どの人には疎まれてしかいなかった」

と言っていた。

「そっか・・・分かってると思うけど、私とテイルはラムネちゃんを大事に思ってるからね？」

「うん。それは分かってるよ？ ありがとう、アカネ、テイル／／／」

「お礼なんていいよ。当たり前のことだもん。ね？ テイル」

「うん。らむねはやさしい、だからすき」

「……あ……ありがと／＼／」

あらら、恥ずかしがり屋モードになっちゃった。でも、私としてはこっちの方が好きだな……見てると、テイルとは違う意味で癒される。あ、そうそう、家にはお風呂も付いてただけ、それかなんかの広さで……なんと！テイルが入っても問題なしだった！良かったよ。

「さ、次はどこを案内してくれるの？ラムネちゃん」

「……えと……こっち……にある……情報屋／＼／」

情報屋か。この先何度もお世話になるかもね……ギートとマイスには何も言わずに出てきちゃったけど、大丈夫だよな？

それから案内してもらって、情報屋に辿り着き中に入る。その建物は現代で言うなら宝くじの建物みたいな感じだった。もちろんちゃんと扉は付いているからそこから入ったよ？中はカウンターがあって、向こう側に一人の女性が座っていた。

長い金髪を多分腰辺りまで伸ばしていて、紅い瞳を持っている。服はローブみたいな物で魔族の象徴である翼が見えていたけど、片翼だった……。

「こんにちは。ここに来るのは初めてかしら？」

「……あ、はい。そうです」

なぜだか反応が遅れてしまった。

どうしてだろう？

「今日は何の用事かしら？何か知りたいことがあるの？」

「はい。何かおもしろいことが無いかなと思ひまして・・・少し前まで滞在していた街では仲が良かった、冒険者の2人に教えてもらってたんですけど・・・」

「こっちにその2人はいない訳か。それで、ここに来たの？」

「そうです。何か情報はありますか？何でもいいんですけど・・・」
とりあえず、何か分かればそこからまた新しい発見があるかも知れない。

「そうね・・・この街から北に2週間ほどの所に谷があるのだけど、そのことは知ってるかしら？」

「・・・いえ、まだ何も知りません。ラムネちゃんは？」

「知ってた。でも、あそこは最近危険だから、まだ近づかない方がいいと思って言わなかったの。ごめんね？」

教えなかったことに罪悪感でも覚えたのか、不安気な顔で謝ってくるラムネちゃん。そんなこと気にしないでいいのに・・・。

「ラムネちゃんは私たちのことを心配してくれたんでしょ？それなら、謝る必要なんてないよ？」

それよりも、ありがとう・・・でも、これからはそういうことは教えてね？知らない内に危険な場所に入ってしまったらそれこそ、危険だから。ね？」

屈んでラムネちゃんに視線を合わせて頭を撫でながら言うと、赤面して頷いた。ホントに可愛いね？

「大好きだよ？ラムネちゃん。これからもお願いね？」

抱き締めるとラムネちゃんも抱き返してくれる。テイルが私の前に回り込んで何か言いたげな目で見てきたから、テイルも一緒に抱き締めた。

「そろそろ、いいかしら？」

「あ、はい。どうぞ」

それからその谷。名前は『魔の谷』と言って名の通りそこには魔物が大量に生息している。でも、さっきもラムネちゃんが言っていた通り最近その谷が危険な様だ。でも、情報士さんは

「最近その谷の魔物達が酷く大人しいのよ。近辺の住人達は助かっているみたいだね？気になるなら行ってみるといいわ・・・何が起こるか分からないけどね？」

と言った。

どういうことだろう？ラムネちゃんは『危険』だと言ったけど、情報では『大人しい』。それはまるきり矛盾していると思う。とりあえず店を出ることにして、あることに気がつき振り返る。

「そういえば貴女のお名前は？私はアカネ・ユキトです。この子はシャドー・ドラゴンの」

「ている」

「この娘が」

「・・・ラムネ・ル・レンドキア」

「そう・・・これから先もよろしくね？それからあたしの名前だけだ」

そこで情報士さんは一度言葉を区切ってから、次の言葉を紡いだ。

「————あたしは名を持たないの。だからごめんね？」

魔の谷くフレイム・ドラゴンとの出逢い

「・・・名前を持たないなんて、本来ならあり得ない。貴女に何があつたの？」

情報士さんから名を持たないと言われて、私が何も言えないで居ると、ラムネちゃんがそう言って情報士さんを見つめた。情報士さんは笑みを受けべた顔のままラムネちゃんを見つめ返して、少ししてから口を開いた。

「今はどうせ暇だから、知りたいのなら話してもいいわよ？体して中身があるわけでもないし。それでも聞きたいの？」

ラムネちゃんはこくと頷いた。それを見て情報士さんは次は私たちを見て「貴方たちも？」と聞いてきたから、私もそれに頷きで返す。

「分かったわ。」

そうね・・・まあ、名前が無いのはあたしが記憶を失ったから。としか言いようが無いわ？」

「それなら自分で名を考えればいい」

間髪入れずにラムネちゃんがそう言った。でも、私もそう思う。実際記憶を失ったらどうなるかは分からないけど、自分が自分であるためには名前はどうしても必要な物だから・・・。

あれ？

「貴女の名前を覚えてる人は周りには居なかったんですか？」

「いいえ、居たわ。でもね？記憶を失ったということはその人達のこととも忘れたってことなの・・・貴女だったら、自分の知らない人が言ったことを信じることは出来る？」

「出来ません」

「・・・意外ね。人間は友情だなんだって言うことが多いと思っ
てたけど」

「私は人間を信じていませんから」

「「え・・・？」」

私の言葉に驚きを示したのは情報士さんでは無く、テイルとラムネちゃんだった。そうだった。ラムネちゃん所かまだテイルにも話してなかったんだ・・・殆ど人間と関わらないようにしてきたから忘れてた。

「どういうこと、あかね？」

「ごめん。また今度詳しく話すから今は・・・」

「・・・わかった。でも、かならずおしえてね？」

「わたしにも・・・」

「分かってるよ？」

やっぱりちゃんと話さないと駄目だね？

「そろそろいいかしら？と言ってもあたしの話は殆ど終わったのだけれど」

「あ、はい。お願いします」

「それじゃ、さっきの続きね？あたしの名前を覚えてくれる確かに居たわ？でも、その人達が言っていた名前は、自分には合っていないと思ったの・・・だから、結局今日まで名を持たずに生きてきた。

これであたしの話は終わり」

情報士さんはふう、と一息ついて席を立ち飲み物とコップを人数分持ってきて私たちにも渡してくれた。お礼を言ってからそれを一口飲む。

「そういえば、この街に住んでいる人たちは貴女をなんて呼んで居るんですか？」

ふと気になったので聞いてみた。

「単純に『姉ちゃん』とか『オイ』とかよ？貴女が初めてね・・・こんなに礼儀正しい態度で接してくれたのは。ねえ、これから来てくれるかしら？」

「え？それはもちろん・・・何度もお世話になるでしょうから。あ、そういえば今日の情報のお代ってどれくらいですか？うっかり払い忘れてしまう所でした」

ラムネちゃんの空間とは別に鞆に仕舞っている小さな袋を出して払おうとすると

「貴女達はただでいいわよ？」

と言われた。

「あ、でもお茶代は払ってね？ 3にんだから銅3枚」

袋から銅を3枚出して、渡しながら理由を聞いた。

「まあ・・・何となくよ。貴方たちなら別にいいかな～・・・って思っただけ。あ、そうそう・・・『魔の谷』に行くなら準備はしっかりしておかないと駄目よ？ 魔物は途中にも結構出るからね？」

「はい。ありがとうございました」

頭を下げてから店を出て、ラムネちゃんに空間の中身を確かめてもらってから渡した達は魔の谷に向けて歩き始めた。

出発して1週間。情報士さんが言っていた通り魔物は結構出てきたけど、問題なく倒して、偶に節約の為に昼食にしたり夕食にした。それから、魔法の練習をする時にラムネちゃんがコツなんかを教えなくて、闇の魔法が少しだけ使えるようになった。魔族は闇を操るのが得意らしい。

これで今使うことが出来るのは火・水・風・氷・雷・闇の6つだか

ら後は土と光の魔法だね。闇を使いこなせる様になったらその2つも練習しよう。

「お休み〜・・・」

「「おやすみ」」

いつもの様に結界を張ってから並んで眠りに着く。

それから5日後の夕方。聞いていたよりも2日早く魔の谷に到着した。これも情報士さんが言っていた通りなんだけど、ここに来るまでは結構魔物が襲ってきたけど近づくにつれて段々と魔物が大人しくなっていた。確かにこれは考え方によっては危険とも考えられるかも・・・大人しいってことはその魔物達を束ねている魔物が居るか、別にも何か原因があるのか。

その原因によっては、本当に危険なことだってあるだろうから。

谷の中を進んで生きながら周りを観察してみるとレグルフやアークロン、バルディア（半人半鳥）やらが居たけど、どの魔物も崖の上や遠くから見てくるだけで何もしてこなかった。

谷は横幅が10メートル位あるから私たちが並んで歩いててもまだまだ余裕はある。その谷を進んで行き途中坂を登ったり、下ったりする。2時間程歩いた所で丁度良さそうな広さの岩場があったからそこで休憩することにした。

魔物達が襲ってこないのはもう分かっているから結界は張らなかった。

「みんなホントに大人しいね？ どうしてなんだろう・・・」

「わからないけど・・・らくにすすめるから、いい」

「・・・わたし・・・も・・・そう思う／＼／」

「それもそっか・・・そろそろ暗くなってくるから、今日はここで寝る？ 固い場所だけど下に何か敷けば寝られると思うし」

いくら魔物が襲ってこないからと言って夜に谷なんかを移動するのは危ない。今の所落ちそうな場所なんて見つかってないけど、脆い場所なんかはあったりするかも知れないし。

「うん」

「・・・空間・・・から・・・ふとん・・・だせ・・・ば・・・だ
い・・・じょうぶ／＼／」

ラムネちゃんが顔を赤くしながらそう言ったから、お願いして空間から敷き布団とついでに掛け布団を出して貰い、念の為に結界を張ってから布団に入る。いつもより全然早い時間だけど久しぶりの布団だ気持ち良くて私はすぐに眠りに着いた。

完全に眠りに落ちる寸前テイルとラムネちゃんが「お休み」と優しく言ってくれたのを感じた。

次の日、最初に目が覚めた私は右にテイル、左にラムネちゃんが居

ることを確認してから起こさないように布団を出て水で顔を洗った。それから暫くして、テイルが目を覚ましそのすぐ後にラムネちゃん起きたので、布団を空間に仕舞って貰い結界を解く。

近くの岩を風で抉って半径50?くらいの窪みを作る。そこに水を貯めてテイルとラムネちゃんにそこで顔を洗うように言うてから私は鞆からごはんを取り出して朝食の準備を始める。

朝食を食べて私たちは探索を開始した。

相変わらず魔物達は遠巻きに私たちを見ているだけだ・・・そのまま進み続けて約3時間位が経ち、寝た場所よりも数倍の広さを持ち景色がとても綺麗な場所に到着した。これ以上先に道は見えないから多分此処が最奥だと思うけど・・・見た所何も無い。

まあ、この谷に入った時から何か強い力は感じていたけどそんな力を持った魔物は出てこなかったからね・・・何も無いのかな？

テイルとラムネちゃんに帰るかどうかを聞こうと思って振り返ると

「ガアアアアア！！」

咆吼と同時に羽ばたくような音が聞こえ、私たちが立っている場所に大きな影が出来た。

突然のことに動きが止まってしまったってテイル達を見ると2人も同じようにで驚愕に目を見開いていた。

私はゆっくりと体をまた正面に向けた。

「・・・これは誰でも驚くかもね？」

私たちの前に姿を現した者、それは

『此処に何をしに来たのだ？人間の娘よ』

30メートルはあろうかと言う程の巨大な体を持った紅いドラゴン。

—————フレーム・ドラゴンだった。

ドラゴンの力とテイルの覚醒

『答える人間。何が目的で此処に来たのだ？返答次第では生きては帰さぬぞ』

目の前の巨大なドラゴンは威圧を込めて私達・・・じゃないか。私にそう言った。前に会ったって言う表現が合っているかは分からないけど、水龍の森で会ったドラゴンもだけど、人間はドラゴンに何をしたんだろう？

今は答えないと本当に殺られるんだろうけど気になる。

『答える人間！』

さっきよりも威圧を込めた声でまた言われる。

「・・・私は5の街に居る情報士さんに此処の情報を貰って来たの。貴方が居たと言うことは知らなかったけど、何もするつもりは無いよ？」

とりあえず本当のことを言ったけど、信じては貰えないだろうな・・・。言い終わった途端目つきがなんか鋭くなったし。

『本当にそうか？お前達人間は遥か昔にも我々龍族を騙し滅ぼそうとしたでは無いか。忘れたとは言わせんぞ？』

————七色の覇者よ！』

「え・・・？」

どういうこと？

『何を訳が分からないと言った顔をしている？お前は七色の覇者。バルハイト・ズィーデルであろう？確かに姿こそ違うが、その力を偽ることは出来ぬぞ？そして、その剣。それが何よりの証拠だ』

フレイム・ドラゴンが指したのはアルカンだった。余計に訳が分からない・・・私はバルさんも知らないし、ましてやこの世界でそんなことがあったなんて知っている訳が無い。

「・・・待って。私はバルハイト・ズィーデルなんかじゃ無いよ？私はアカネ・ユキト。七色の覇者なんかでもない・・・それに、龍族を滅ぼす？それなら何で私はテイルと居るの？」

私はテイルを右手で示しながら言った。

『テイル？そのシャドー・ドラゴンのことか？墜ちたものだ・・・人間如きに名を与えられ、今まで共に居たのか？龍族の誇りをお主は持っておらぬのか？』

フレイム・ドラゴンはテイルに問いかけた。その声には明らかな軽蔑の色が見える。

テイルはフレイム・ドラゴンを睨みその問いに答えた。

「わたしはあかねがすき。だから、いつしょにいる・・・あなたにはかんけない」

テイル・・・ありがとう。

『下らぬ。人間はまたいつか必ず我等を騙すだろう。どれだけお主がその人間を信じていようと、いつかは裏切られ、見捨て「そんなことない!」・・・何だと?』

テイルはフレイム・ドラゴンの言葉を力強く遮った。

「あかねは、にんげんにおそわれていたわたしを、たすけてくれた。さいしよはあかねも、そのにんげんたちとおなじだとおもったけど・・・ちがった。

ごはんもわけてくれたし、ねるときはわたしもだいじょうぶなように、けっかいをはってくれた」

初めて会った時のことだ。

私を警戒していて寝る時には距離を置いて・・・でも、ご飯は強請ってきていた時のテイル。

「あかねのなかまになったとき、あかねはとてもよろこんでくれた。はじめてまものをたおしたときは、こわさにないていたけど、そのこわさにまけないようにがんばってた。

わたしにもずっとそばにいてほしいって、いつてくれた。うれしかった。

こんなわたしでも、あかねをささえることができるんだって、おもえて・・・」

仲間になって、2の街で依頼を受けて水龍の森でドラゴンと会話した後、トライ・サーペントを倒して、その時の斬った感触が怖くて私はお風呂でテイルを抱き締めながら泣いて、ベッドでテイルに『ずっと一緒にいてね?』と頼んだ。

私も嬉しいよ? そんな風に想ってくれていることが分かって・・・。

「それからずっと、わたしはあかねといっしょにいた。

いろんなところをまわった。わたしはおおきくなって、あかねにかかえてもらうことはできなくなってさんねんだったけど、たのしかった。

れんどきあでは、らむねをまもるためにじぶんのをよごした」

つい最近のことだ。ラムネちゃんを守る立場に有りながら命を狙っていた団長と団長に頼まれてラムネちゃんを暗殺しようと居ていた、7人。

その7人と団長を殺した翌日、ラムネちゃんが来て部屋に呼ばれお札を言われて、一緒に行きたいと言ってくれたこと。

「そうだよ? アカネは何の関係も無いわたしの為に手を汚してくれた。貴方ならわたしが誰か分かるよね? 気高き龍族の一体。フレイム・ドラゴン」

そこでラムネちゃんが入ってきて、フレイム・ドラゴンにそう言った。心なしか怒っている様な気がする。手にはいつの間に出したのか、武器の鎌。

『魔王・ラムネ・ル・レンドキアか。置物とは仮にも魔王までもが、

そんな小娘と共に居るとはな』

「アカネを侮辱するなら、誰であろうと許さない」

「わたしだってそうだよ？あかねはほかのにんげんとはちがう」

ラムネちゃんもテイルも魔力を解放して、攻撃の態勢に入った。

『我と戦うつもりか？』

「・・・・・・・・・・」

2人は沈黙でそれに応え、フレイム・ドラゴンも肯定と受け取ったのか魔力を解放する。

その途端フレイム・ドラゴンの体が真紅の炎に包まれ、周りの岩が溶け出した。私たちが立っている場所が無事なのはまだ抑えているからだと思う。この程度が本気の訳がない。

『いいだろう・・・掛かってこい！完膚無きまでに叩き潰してくれろぞ！シャドー・ドラゴン！レンドキアの魔王よ！』

言うと同時にテイルとは比べものにならない大きさの炎の玉を繰り出した。

「展開！」

バチ！

慌てて結界を張って、玉と結界はぶつかり一瞬の拮抗の後、何とか

ずらすことが出来たけど、暫くして後方で爆発が起きた。

「ハア・・・ハア・・・」

威力が違いすぎる。これでも、今までで一番強力な結界だったのに・・・それで、ずらすのが精一杯だなんて・・・。

「アカネ！大丈夫！」

「ハア・・・うん、なん・・・とか、ね？」

『ほう・・・防いだか？やはり七色の覇者は伊達ではないな？』

「・・・だから、私は七色の覇者なんかじゃない！アカネ・ユキトだって言ってるでしょ！テイル！ラムネちゃん！アルカン！本気で行くよ！出し惜しみは無し！」

「「うん！」」

腰からアルカンを抜き構える。今の刀身の光は青。気休め程度にしかないかも知れないけど、火には水で対抗するしか無い。

「テイルは空中から攻めて！ラムネちゃん、自分の空間に入ること出来る？」

テイルはすぐに飛びフレイム・ドラゴンの後ろに行く。

「出来るよ！それで攻撃すればいいんだね？」

「うん！お願い！私は出来るだけ注意を引きつけて戦う！」

ラムネちゃんは頷き空間に入る。

『そんなことで我に勝てると思っているのか？』

「何もせずに殺られるよりはましだよ！ハッ！」

跳んで水を剣から放つ。フレイム・ドラゴンは上空に飛んで躲し、それをテイルが追いかけるけど、力が違いすぎるのか全く追いつけずに居る。そして後ろを取っている筈のテイルが後ろを取られ、フレイム・ドラゴンの爪がテイルに当たりそうになったのをまた私が水を飛ばして妨害する。何とか間に合ったけど、この位置じゃ当たらない。

「テイル！」

呼んで戻ってきたテイルに跨り空中戦に突入する。

「余り無理に追ったら駄目だよ？悔しいけど、今のテイルはあいつの速さには着いていけない」

「うん。わかってる」

『只さえ私の速さに着いてこれぬ者が、荷物を乗せた状態でまともに戦える訳が無からう！』

フレイム・ドラゴンがさっきよりも大きな炎の玉を吐いてくる。

「だから、その分を私がカバーする！」

それにまた水をぶつけるけど、悉く砕かれ迫ってくる。

当たりそうになった瞬間周りが暗くなり、玉も消えた。

「アカネ」

「あ、ラムネちゃん。ありがとう、助けてくれて」

「ううん。それよりも、あいつにはわたしの攻撃が通らなかった。潜んで何度か攻撃したけど、傷ひとつ付かない」

はつきり言って・・・勝ち目がないのは分かった。いくら私の魔力が無限で最強の肉体なんて持っていても、まだこの世界に来て1年しか経っていない。その期間で完全に使いこなすことが出来ないことも、テイルも今の力じゃ対抗出来ないことも、十分分かってる。

分かってるけど・・・。

「あかね。かおをあげて？」

「テイル？」

「あきらめたらおわりだよ？わたしたちならできるよ。がんばろう！」

「そうだよ？攻撃が通じないとは言っても手段が何も無い訳じゃない」

「……そうだね。頑張ろう！2人とも！」

「「うん！」」

3人で頷き合い、アルカンも輝きが強くなった。

その瞬間。

『ガアアアアアアア！！』

フレイム・ドラゴンの咆吼が聞こえ私たちの居る空間に亀裂が入った。そして更にフレイム・ドラゴンが咆吼を上げ、空間が完全に崩壊する。

「ラムネちゃん！乗って！」

空間が割れ空中に投げ出されたラムネちゃんの手を掴み後ろに乗せる。

「アカネ、テイル！後ろ！」

「「え？」」

『遅い！』

振り向いた時には既にフレイム・ドラゴンが腕を振り上げていた。

ドゴ！

「ガッ！」

攻撃がテイルに命中しきつまで立っていた場所に3人とも飛ばされて叩き付けられ、数メートル地面を削りやっと止まった。

「・・・う・・・あか・・・ね・・・らむ・・・ね。だい・・・
じょうぶ？」

「う・・・てい・・・る。あ！テイル、血が！早く治さないと！ぐ・・・」

攻撃をもらに受けたテイルは横腹から出血していた。大量の血が今も流れていてこのままじゃ命に関わる程の量だ。急いで治療をしようとするけど、私にもダメージがある思うように動けない。ラムネちゃんは気を失っている。幸い酷い怪我はしていなかったけど、顔や腕の所々に傷がある。

『フン！その程度の力でよく我と戦おうなどと思ったものだな？』

フレイム・ドラゴンが私たちの数メートル先に降り立ち、そう言うてきた。

『さて、これで終わりにしてやるぞ？七色の覇者よ』

周りの岩がさつきよりも遙かに早い速度で溶け出し、溶岩のようになっていく。熱気は私たちどころかこの谷全体に届きそうな程だ。このままだと攻撃が来る前にこの熱さでやられてしまうかも知れない。

宣言した通りこの攻撃で終わりにするつもりなのだろう。

10メートルは悠に超える大きさの炎の玉が形成された。

「あん・・・なの・・・ふせげる・・・わけ・・・ない・・・」

「ううん。防いで見せる。テイルとラムネちゃんは絶対に私が守る」

体に鞭を打って立ち上がり、テイル達の前に出て魔力を全開にして、アルカンを構える。刀身は更に強く輝き、5メートル程の水の刀が形成される。蒸発してしまうなら逆に打ち消すだけの魔力で対抗するだけだ。

『喰らうがいい！』

巨大な炎がこちらに向かってくる。

「アルカン！」
ガッ！

振り上げて渾身の力を込めて炎に向けて振り下ろしたアルカンと炎がぶつかる。

「アアアアアアアアア！！！」

『その程度で防げる訳が無からう！大人しく燃え尽きるのだ！』

「絶対に・・・防いで見せる！！アルカン！！」
ガア！

「いっけえええええええええ！！」

ドガアアアアアン!!

大爆発が起き炎も水も互いに打ち消し合った。私はその爆発で吹っ飛ばされてテイルにギリギリの所で受け止められて、何とか無事だったけど、フレイム・ドラゴンは全くと言っていい程無傷で同じ場所に立っている。

「そ．．．んな．．．」

『まさか本当に防ぐとはな．．．お前は一体何者なのだ?』

ゆっくりとこちらに近づいて来ながらそう問い掛けてくるフレイム・ドラゴン。

「さっき．．．も．．．言った．．．で．．．しょ? 私．．．は．．．アカネ．．．ユキト．．．よ」

もう本当に立てない。喋るのもそろそろ限界だ。

『そうか。お前をこのまま生かしておくのは危険だ。確実に息の根を止めるとしよう』

私はフレイム・ドラゴンに右手で掴まれた。握りつぶすつもりかと思ったがどうやら、爪で刺し殺そうとしているみたいだ。

「やめ．．．ろ．．．」

『諦めろ。シャドー・ドラゴンの仔よ．．．元々我等龍族と人間は相容れぬ存在。お主にはお主の居場所がある。ここでは無い。それだけのことだ』

「ちが・・・う。わたし・・・・の・・・いばしょは・・・・あかねとらむねの・・・・となり・・・・それ・・・いがいは・・・・ない！」

『・・・まだ立つか？シャドー・ドラゴンの仔よ。何故そこまでこの娘に拘る？我等の寿命に比べれば人間などすぐに死んでしまうのだぞ？その魔王とて同じだ。そうなれば何れお主は孤独になる』

それは私が恐れていたことでもあった。

いつか私が死んだらテイルは1人ぼっちになってしまう。

分かっていた。永遠に側に居ることなんて出来ないことは・・・。

それでも・・・それでも、私は・・・。

「それでも、わたしはあかねとらむねがすきなんだ！だから、おまえなんかにころさせはしない！」

『やはり、この娘は危険だ。早々に息の根を止めさせて貰う！』

フレイム・ドラゴンが左手を振り上げた。

「止めろおおおおお！！」
ゴア！

『む！』

テイルが叫ぶと同時に強大な魔力が溢れ出したのを感じた。

なんとか首を後ろに向けて、見ると黒炎がテイルの体を包み込んで

いた。

次の瞬間、黒炎に包まれたテイルがフレイム・ドラゴンの私を掴んでいる方の腕に飛び出して、助けてくれた。

『グウ！何だ、これは！』

フレイム・ドラゴンの腕は燃えていた。

テイルの黒い炎によって。

テイルを包んでいる黒炎は段々大きくなっていき、私を包んでいるテイルの手も大きくなっていった。

バサツとさっきまでよりも遙かに大きくなった翼の羽ばたきによって黒炎が晴れた時、姿を現したのは

「アカネ。もう大丈夫だよ？」

—————大きくなったテイルだった。

フレイム・ドラゴンの元まで戻りテイルはラムネちゃんを左手に乗せる。まだ気を失っているけど、ちゃんと息はあるの確認して私は安心した。

『お主、何だ、その姿は？』

テイルと向き合う形になったフレイム・ドラゴンがそう問いかけた。

「驚く必要があるの？ 貴方と同じ成体になっただけだよ？」

『そんなことは分かっている！ 我が聞いているのは、何故いきなり成体になったのかということだ！』

そう、テイルは成体になった。どうしてなのかは、私だって分からない。今まで余り成長しなかったテイルが、一気に成長したんだから・・・。3メートル程だった体はフレイム・ドラゴンよりもほんの4～5メートルしか差が無い程まで大きくなった。

「そんなのワタシだって分からない。でもこれで、アカネとラムネを守ることが出来る！」

「テイル・・・」

「アカネは休んで？ 今まで守って貰った分、今度はワタシが2人を守るから」

テイルは近くの岩場に私とラムネちゃんを降ろした。その時、黒い炎が私たちの周りを囲んだけど、熱を感じない、不思議な炎だった。問いかけようと思いテイルを見ると

「その炎は2人を守ってくれるから、安心して？」

と優しく言ってくれた。

「ありがとう、テイル」

テイルは微笑んでフレイム・ドラゴンとまた向き合った。

「決着、付けようか」

『そうだな・・・』

「アカネ、応援してくれる？ワタシがこいつに勝てるように」

背中を向けたままテイルはそう言った。

「当たり前だよ。頑張れ、テイル。早く終わらせて私たちの家に帰ろう？」

「もちろん！」

そして2体のドラゴンはどこからともなく飛び上がり、止まった所で

「『——————ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！』」
ドガアアア！

咆吼を上げて激突した。

決着く私達の絆く

『何故分からぬのだ！人間等と居ればお主は必ず不幸になる！』

テイルとフレイム・ドラゴンはどう何度目か分からない程激突し、今は組み合っている状態になっている。そのままの状態でフレイム・ドラゴンがテイルにそう言った。

「ワタシはアカネとラムネがいればそれだけで幸せなんだ！」

『先も言ったであろう！奴等は何れお主よりも先に死ぬのだぞ！』

「そんなことは関係ない！」

『グあ！』

フレイム・ドラゴンの言葉に反論してテイルは頭突きを繰り返し、それによってフレイム・ドラゴンは一瞬怯んだ。その隙にテイルは黒炎をぶつけ、その炎はフレイム・ドラゴンを包み込む。でもそれもほんの一瞬のことで、フレイム・ドラゴンは直ぐに炎を払って距離を取った。

『くっ・・・火を司る我に炎で傷を負わせるなど・・・』

「貴方には絶対に負けない」

テイルは力強く言った。明確な意思を込めて・・・。

「頑張れ・・・テイル」

勝って、3人で帰ろう？

やりたいこと、沢山あるから・・・。

『我とお主に負ける訳にはいかぬ・・・他の者に示しが付かぬのでな』

「そんなことワタシには関係ない。ワタシは貴方に勝って2人と一緒に家へ帰る・・・それだけ」

『・・・お主がどれだけあの者達のことを思っているように、あの者達の命が先に尽きるのは変えられぬ事実なのだ。それでもお主は・・・』

「さっきも言った。ワタシはアカネとラムネが居ればそれでいい・・・」

『そうか。ならば！』

「ガッ！」

フレイム・ドラゴンは一気に決着を付けることにしたのか急接近してテイルに攻撃した。それは諸にテイルの腹部に命中して今度はテイルが怯んだ。フレイム・ドラゴンはテイルの尻尾を掴み振り回してから地面に向かって投げつけた。

私達が居るのは岩場の端の方だから、落ちていくテイルは途中で見えなくなってしまった。フレイム・ドラゴンはテイルを追って自身も地面に向かって、急降下していく。その後、少しして地響きが聞こえてきた。おそらくテイルが地面に叩き付けられたんだと思う。あの状態から立て直すことが出来たとしても、そのことばかりに気を取られて迫っていたフレイム・ドラゴンに気付く余裕はなかったと思うから……。

『その程度で我に勝てると思っているのか！シャドー・ドラゴンの仔よ！』

フレイム・ドラゴンの声。

それからしばらく地上で戦っていたのか、姿は確認出来なかった。ひたすらぶつかり合うような音だけが聞こえてくる。その後どちらか分からないけど、羽ばたく音が聞こえた。先に飛び上がったのはテイルだった。そして、テイルをフレイム・ドラゴンが追い掛ける。テイルは地上戦でダメージを負ったのか、動きがさっきよりも鈍っていた。まだ成体になったばかりなことも関係しているのかも知れないけど、それでも鈍い。これじゃ直ぐに追いつかれちゃう。

「私も……戦わな……いと」

治癒魔法を掛けようとしても、私自身負ったダメージが大きいのかそれすらも出来ない。

こんなんじゃない……テイルとラムネちゃん。

2人と一緒に居ることなんて出来ないよ・・・もっと、強くならないと・・・。

ポタ・・・。

気が付くと私は涙を流していた。

涙は止め処なく溢れて来る。

「悔しいよ・・・テイルは・・・頑張っ・・・るのに・・・何も・・・出来ない・・・」

声が震えているのが自分でもハッキリ分かる。

こんなにも涙を流したのは、多分初めてだ・・・私も一緒に戦いたいの・・・。

ううん・・・泣いてる暇なんか無い。

泣く位なら怪我を治して戦うんだ。

「待ってて、テイル。直ぐに行くから」

痛む体を見捨てずに治療魔法を掛け、怪我を治す。完全に治すことは出来なかったけどフレーム・ドラゴンの攻撃を邪魔出来ればそれでいい。

「ラムネちゃんはここでゆっくりしてて？絶対に帰ってくるから・・
」

ラムネちゃんにも治療魔法を掛け、結界を展開して炎から出て崖のギリギリの所に立ちアルカン構え、テイルの後ろから炎で攻撃しているフレーム・ドラゴンに向かって水を飛ばす。それでこっちに気が逸れたのか、攻撃を中止して私の方を向いた。

「テイル！私も一緒に戦うよ！だから絶対に勝とう！」

「アカネ・・・うん！」

『人間が・・・我等の戦いの邪魔をするな！』

「これ以上アカネ達は傷つけさせない！」

フレーム・ドラゴンが私に向かって炎で攻撃してこようとしたけどそれを飛んできたテイルが妨害し、その時に私が水を撃つ。

『グア！おのれ・・・小娘が！』

余り大きなダメージは与えられなかったかも知れないけど、当たれ

ば十分だ。

「ワタシだって居るよ！」

『ガッ！』

私に意識が向いている間にテイルがフレイム・ドラゴンを叩き落とした。力に差があるからなのか、体制は直ぐに立て直されたけど少しでも注意が逸れれば私が攻撃する。

「どんどんいくよ！」

今度は連続で水を飛ばす。流石に全部を当てることは出来なかったけど2〜3発当てる事が出来た。更に追撃するけど

『く・・・小賢しい！』

フレイム・ドラゴンから発せられた熱気によってすべて蒸発してしまった。やっぱりまだまだ力は残ってるみたいだ。どうにかして大きな一発を当てないと・・・。

「テイル！」

「うん！」

テイルを呼んで背中に乗り距離を取る。

『燃え尽きろ！』

さっきよりは小さいけど十分な熱が込められた炎が向かってくる。

それにテイルが炎をぶつけて何とか相殺した。発生した煙によってフレイム・ドラゴンの姿が確認出来なくなった。

『ガアアアア！』

でもフレイム・ドラゴンは構わず炎で攻撃してきた。何とか躲したが、その後も連続で攻撃してくるから、中々反撃出来ない。

暫くしてどこからでもお互いの姿が確認出来る位に煙が晴れ、今度は明確に狙ってくる。

「やっ！」

早さに重点を置いての攻撃だったからかアルカンで相殺できた。

『く・・・』

フレイム・ドラゴンは悔しそうに顔を歪めた。でも、もしかしたら今度こそ決着を付ける気なのかも知れない。私が精一杯の思いで相殺した炎の玉よりも更に大きい。

「テイル・・・私達も次で決めるよ？」

「うん・・・分かってる」

テイルは一気に距離を取り黒い炎を全身に纏った。

でも、その炎は私にとっては熱くなかった。

ありがとう。

私も魔力を集め水の刀を造る。

大きさはさっきよりは小さいけど、魔力を圧縮している分威力はさっきよりも高い。

『何をしようと無駄だ！これは絶対に防ぐことは出来ない！』

「防ぐつもりなんて無いよ・・・正面からぶつかっていく」

フレイム・ドラゴンには聞こえないように呟く。

『行くぞ！シャドー・ドラゴンの仔！そして七色の覇者よ！』

そういつて最大の炎を放ってきた。大きさはかなりのモノなのに速さも十分ある。流石は火を司るドラゴンならではの。

「テイル！突っ込むよ！」

「うん！」

テイルは炎に向かって突っ込んでいき速さを上げていく。

「グアアアアアアアア!」

咆吼を上げながら轟音を立てて炎とぶつかる。

『飲み込まれるがいい!』

「負けるもんかアアアアアアア!」

———ゴバアア!

「はあああああああ!」

『何!』

炎を突き破った勢いのままフレイム・ドラゴンに向かっていきアルカンを振り下ろし

『グアアア!』

右腕を斬り落とした。

アルカンをフレイム・ドラゴンの首元に添える。

「私とテイルの勝ちだよ?」

『……何故だ? 何故人間などと共に戦える? お主がどれだけその者達を慕っていても、何れ別れが来るのだぞ? そうなればお主は……』

「ワタシはアカネとラムネが好き。だからこれからも一緒に居る。」

それだけ・・・」

「私は確かに人間で、ラムネちゃんは魔族で、貴方達龍族と比べたらちっぽけな命かも知れない。それでも私達はテイルと一緒に居るよ？テイルが大好きだから・・・この先もずっと」

『・・・・・・・・その思いに偽り「無い」・・・そうか。ならば好きにするがいい。我はもうお主等には関わらぬ』

そう言っつてフレイム・ドラゴンはどこかに飛び去っていった。その姿が見えなくなった途端私は体中の力が抜けて危うく落ちそうになったけど、テイルがキャッチしてくれた。

「ありがとう、テイル」

「・・・ラムネの所に戻ろうか？」

微笑みで答えてテイルはそう言った。

「そうだね。早く家に帰って怪我を治さないと」

それからラムネちゃんを背中に乗せて落ちないように私が支える。それから5の街の人目に付かないところで降ろして貰って影の中に入って貰う。それから家に帰ってラムネちゃんをベッドに寝かせてからもう一度治癒魔法を掛ける。大分治すことが出来たのか、ラムネちゃんの寝顔は安らかだった。

私も疲れたから装備を外して一緒にベッドに入り目を閉じる。

「アカネ・・・ずっと一緒にいようね？」

「当たり前だよ。テイルともラムネちゃんとも・・・ずっと一緒」

「うん」

「お休み。テイル、ラムネちゃん」

「お休み。アカネ、ラムネ」

「「大好きだよ」」

意外と便利く歪みと異変く

「どうする？」

今朝目が覚めてテイルがいないことに焦ったけど、考えてみればあのサイズのテイルと一緒に寝られ無いから陰に入っけてもらったことを思い出し、起きたラムネちゃんも交えてどうにかできないか相談している。

一気に成体になったから大きさも桁違いだし・・・サイズを自由に変えたりできたら便利なんだけど。

それができればテイル自身既にやっているだろうしな・・・。

「テイルも分からないんだよね？」

『うん。一気に成長したから、戸惑ってる部分の方が多い・・・』

「だよねえ・・・ラムネちゃんは？」

「わたしにも分からない」

まあ、分かればそもそも相談すらしてないもんね。

・・・あ！

こういう時は神に聞けばいいのか。

「テイル、ラムネちゃん、今から私は良いって言うまでの間静かにしててね？」

『「うん」』

それから私は念じて久しぶりに神と会話した。

『やあ、久しぶりだね？』

『うん。それで聞きたいことがあるんだけどいい？』

『いいよ、なんだい？』

『テイルのことなんだけど・・・昨日フレイム・ドラゴンと戦ってる時に一気に成体になったの。それで、大きさも桁違いになっちゃったから、どうにかできないかなあ、と思って・・・』

『成る程ね・・・テイルはシャドー・ドラゴンだね？』

『うん、そうだけど・・・それがどうかしたの？』

『前は言い忘れていたんだけど、シャドー・ドラゴン、いや、龍族は成体になって一定期間が過ぎると体の大きさを自由に換えられるようになるんだ・・・テイルがそんな一気に成体になるなんて思っていたなかったから、今度連絡があった時に伝えればいいと思ってただけだね・・・悪かった』

『ううん。教えてくれてありがとう。でも、それなら何でテイルは

そのことを知らないの?』

『それは僕にも分からない。何かが原因でそのことを忘れているのかも知れないし、もしかしたら親が教えなかったのかも知れない・・・なんにせよ、テイルは大丈夫だよ? 一定期間というのがそれぞれの龍族で違うみたいだけど、シャドー・ドラゴンは大体1ヶ月位だから。』

他には何か聞きたいことある?』

『うーん・・・・体のサイズを自由に換えられるのに、なんで他の龍族は変えないの?』

『ああ、それは単に需要が無いからだよ。本来人と龍が共存するなんてことは無いからね。その点に於いて君は特別かも知れない。他には?』

『ううん。今の所はもう無いよ?』

『構わないさ。またね?』

『うん』

『良い旅を』

『ありがと』

そこで念話を終えて、目を開き、

「もういいよ? 2人とも」

2人にそう言った。

それからテイルとラムネちゃんに神から聞いたことを伝えて、街に
いる間はテイルは私の影に入ってもらうことになった。

それから情報屋さんに行って何か変わったことは無いか聞いた。

昨日今日で何か変わるとは思ってなかったけど、流石は情報屋と言
った所か、どんどん新しい情報が出てきた。そして、その中にあっ
た『真っ直ぐ歩いたつもりがいつの間にか元の場所に戻ってくる森』
と言う不思議な場所のことを聞き、お茶代を払って向かうことにし
た。

「ありがとうございます！いこ、テイル、ラムネちゃん！」

『「うん！」』

街の外に出て、テイルが成体に慣れたいと言うので背中に乗せても
らって東に飛びその森まで移動した。できれば速度をもう少し落と
して欲しかったです。

私もラムネちゃんも背中で目を回してしまいました。

「大丈夫？アカネ、ラムネ？」

「あはは・・・大丈夫大丈夫・・・でもちょっと休憩させて？」

「わた、し・・・も・・・」

それから5分程休憩して、まずは歩いて通ってみようと思い、歩くこと数分特に変化は無かったけど、よく見れば確かに見覚えがある場所に出た。本当にいつの間にか戻ってきてる。

「ちょっと穴開けようかな・・・せい！」

ドゴン！

「あ、やり過ぎた」

ちょっと凹ませよう位の気持ちでやったのに、30?くらい凹んだ。

「ま、いいか。今度は走って言うてみよう？」

「うん」

「分かった」

ただいま真剣モードのラムネちゃん。
何故？

それから走って森を突っ切ろうと思ったけど、

「お！あだ！」

何かに足が引っかかって転けた。

「いたゝ・・・これって、さっきの穴だよね？」

「うん」

「やっぱり戻ってきてるんだ・・・面白いな。今度は飛んで行ってみよう?」

「分かった」

テイルの背中に乗ってできるだけ低空飛行をして飛んでもらったけど、やっぱり戻ってきた。上から見たら何か分かるかなと思って行ってみたけど、見た目は何の変哲も無い森。上を通って行っても戻ってきちゃのかなと思って、飛んでもらったら、何か一瞬空間が歪んだ様な気がした。

「2人も感じた?」

「うん。何か変な感じがした」

「多分、空間の歪みが自然発生したんだと思う・・・何か大きな力同士がぶつかったりした場合もあるけど、この辺りにそんな力を持つような魔物もないから・・・」

「でも、森を通った時は何も感じなかったよね?」

「もしかしたら森自体が何かの力を放っているのかも知れないけど、よく分からない」

「このままで良いのかな?」

「自然発生した場合は長くても2日くらい経てば消えるから、何もしなくても問題ないよ?」

「そっか・・・じゃあ、戻る？」

「アカネとラムネはもう良いの？」

「私は良いけど、ラムネちゃんは？」

「わたし・・・も・・・いい／＼／＼」

あ、戻った。

それから適当にテイルが飛びたい方向に飛んで暫く空の散歩を楽しみに、街に戻った。

その晩アルカンと歪みについて話したけど、アルカンはどうも、あの歪みが自然発生した物とは思えないと言っていた。

森に行ってから約3週間。

情報屋さんに行くと、あの森に変化が起ったと言うことを聞いた。

いつの間にか戻ってくることは無くなったらしいけど、それと変わるように突然魔物の動きが活発化して、本来ならそこに棲息していない魔物までいるみたいだ。

私たちはまたその森に向かうことにした。

森に着いて見たのは森を埋め尽くす程の魔物の大群だった。

歪みの向こう

「それじゃ、いくよ？」

私の問いにテイルとラムネちゃんは頷いた。

森に來た私たちは最初は魔物を殲滅しようと思ったけど、記憶操作の力を魔物相手にも使えないかと思いついてみた所、認識できている魔物の記憶を操作することができたから、他の魔物達も元々この森に住んでいる魔物達と馴染めるように、纏めて記憶を操作した。

私たちのことは敵じゃないという軽い認識で済ませた。

こうなった異変を探して森を歩いていると、途中でアルカンが震えた。

テイルとラムネちゃんを呼び止めて、私は腰のベルトからアルカンを鞘のまま抜いて目の前に翳す。

すると、アルカンが右の方を向いた。

それに従って進んでいき、暫く進むと今度は左へ、また右へと行った感じで奥を目指していくと、そこでアルカンの動きが止まった。感じてみるとそこは歪みが発生していた。

奥にあつて、誰もここまで来ていなかったから気付かなかったんだ。

その歪みを見ているとラムネちゃんが中に入ってみようと言った。真剣モードだったから、おそらくこの歪みには何かがあるんだろう。

アルカンを抜いて歪みに近づき、振りかぶって歪みを斜めに斬ると一気に拡がり、今のテイルでも余裕で入れる程の大きさになった。アルカンにお礼を言って鞘に収め、2人を見てから頷き合って私から中に入っていく。

中は真っ暗で何も見えなかったけど、少し先に光が見えていたから、どこかに繋がってるのは間違いないと思う。後ろからテイルとラムネちゃんが入ってきたことを確認して、光に向かって進んでいき、外に出て、光によって閉じていた目を開くと

「うわぁ・・・」

思わずそんな声が漏れた。

テイルとラムネちゃんも同じみたいだ。

見渡す限りの草原が広がっていた。

どうしてそれだけでこんなにも感動を覚えたのかは分からないけど、分からなくても良かった。私たちはこの景色を見て感動した、それだけで十分だった。暫くの間、私たちはその景色に見惚れていて奥に人影が見えた所で、やっと警戒を始めた。

魔物が出なくて本当に良かった。

人影の数は1つ。

相手は1人だ。

敵がどうかなんて分からないけど、見知らない場所で簡単に警戒を

解いてはいけない。今までも結界を張っていたから危ないことはなかったけど、それは単に私の結界を破る力を持った魔物がいなかっただけのことだ。

この前戦ったフレイム・ドラゴンの攻撃も結界だったら防ぐことができていたかどうか分らなかった。と言ってもあの時はそんなことを考える余裕なんてなかったけど。

人影が数十メートル先まで来た。多分女だろう・・・遠目からでも分かる程のスタイルの良さだ。ちよつと羨ましいな。と思っていると、向こうが走ってこちらに駆け寄ってきている。

「て！ちよ、ぶつかる！・・・え？」

とっくに私たちの姿が確認できる距離まで来ていたのにも関わらず女の人は走る速度を緩めずに走ってきて、ぶつかると思った私は思わず目を閉じたけど、とっくにぶつかる所まで来た筈なのに衝撃は来なかった。見ると、女の人はいなくて後ろを見ると、女の人が背を向けて走っていた。その先にはおそらく女の人を待っていたであろう、男の人がいる。

「どうなってるの？」

「アカネの体を擦り抜けたの」

「え？」

分からないまま呟くとラムネちゃんがそう答えた。でも、確かにそうでもない説明は付かない。明らかにぶつかるコースだったにも関わらず、私も女の人もぶつかっていないんだから・・・。

「テイル？」

「ここ・・・何か変」

「何かって？」

「分からないけど・・・ちょっと上から見てくるね？」

テイルはそう言って飛び立った。羽ばたきによって発生した風が私とラムネちゃんの髪を揺らした。

周りの草木は一切揺らさずに。

確かにこの場所は変だ。あれだけの風が発生したなら揺れないなんてあり得ない。私は自分の足下を見た。少しの間見つめて足を退けてみると、そこに足跡はなかった。感触はあるのに、この場所は私たちを認識していない。

「ラムネちゃん、足下を見てみて？」

「？うん・・・何も無いよ？」

「今度は足を上げてみて。どっちでもいいから」

「うん・・・あれ？」

ラムネちゃんも気付いた。いや、そもそもさっきテイルが飛び立った時点で気付くべきだった。今のテイルが地面に立ってそこに後が付かないなんて考えられないことなんだから。

「足跡がない？」

「うん」

ラムネちゃんが気付き私は頷いた所でテイルが戻ってきた。

「可笑しかった。ワタシが街の上を飛んでも誰も空を見なかったし、それにワタシの影がなかった」

テイルの言葉を聞いて私とラムネちゃんはまた下を見た。

確かに影がなかった。

どうなっているんだろう？この場所は・・・。

「とにかく調べてみよう。テイル、その街まで案内お願い」

「うん」

私とラムネちゃんはテイルの背中に乗り、その街へと向かった。

その途中、何度か下を見たけど、確かにテイルの大きな影はどこにもなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9338v/>

人間不信の少女が異世界でなんやかんやする話

2011年11月1日00時52分発行